

岐 阜 大 学

日本語・日本文化教育センター紀要

2023

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要

2023

巻頭言	橋 本 慎 吾	1
-----------	---------	---

論 文

【研究論文】

日本語学習者の誤用に対する気づきの視線：誤用探索課題における視線分析より	吉 成 祐 子	3
--	---------	---

【授業報告】

日本文化科目の工夫と課題：「日本文化へのいざない」「地域実験―岐阜を知る」	土 谷 桃 子	13
---	---------	----

年 報（2023年4月～2024年3月）

1. 日本語研修コース	23
2. 日本語・日本文化研修コース	37
3. 日本社会文化プログラム	40
4. キャリア日本語	41
5. 全学共通教育	43
6. 年間行事	44
7. 交流ラウンジ	51

資 料

岐阜大学留学生数	55
----------------	----

巻頭言

日本語・日本文化教育センター長 橋 本 慎 吾

この『岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2023』は、日本語・日本文化教育センターが旧留学生センターであった1998年に発刊した『岐阜大学 留学生センター紀要 創刊号』から数えて第26号になります。紀要に先行し、留学生センターが発足した1996年からしばらくは『留学生センター年報』を発行していましたが、『紀要2000』（通算第3号）から年報を合冊し、現在の体裁になりました。概ね四半世紀にわたって本センターの研究活動・教育活動を報告してきたことになります。

紀要と年報を合冊にしたことについて、『紀要2000』発行時の留学生センター長であった堀内孝次先生は「センターの活動を包括的により広く情報提供するため」とあり、「本センターの教育活動状況や専任教員の専門研究の内容等を知ることができる」と記しています。紀要が「専門研究の内容」、年報が「教育活動状況」をまとめたものであり、それを合冊にすることで「包括的により広く情報提供」することができるということでしょうか。実際、これまでの通算25号には、専任教員だけでなくセンターで教育活動を行っている非常勤講師の方々にも自身の研究内容を発表していただいております、主に日本語・日本文化関連分野の様々な研究活動が行なわれていることがわかりますし、また年報編では、センターが実施している教育活動を報告していますが、授業内容だけでなく問題点、改善点、今後の課題などが詳細に（赤裸々に？）報告されているのが本センター紀要の特徴であると思います。

本紀要は日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）の教育活動を年報として報告していますが、これまで本学の日本語教育の根幹である「日本語研修コース」、国で日本語・日本文化を主専攻とする留学生を対象とする「日本語日本文化研修コース」、日文センター所属の交換留学生を対象とする「日本社会文化プログラム」といったコース・プログラムによる日本語・日本文化教育活動を報告してきましたが、今号からもう一つ、「キャリア日本語」の活動報告を加えることになりました。これは2017年に始まった「留学生就職促進プログラム」の一環として行なわれてきた教育活動ですが、留学生の就職支援のための日本語教育を日文センターが行っていることを情報提供する意味合いから、今号からこの報告を加えることになりました。これまでの通算25号でも日文センターの業務・活動がその形を変え、また新たな活動が加わってきたことを報告してきましたが、この26号以降も、より充実した研究・教育活動を報告できるよう、センター教員が一丸となって取り組んでまいります。

本紀要は、論文1編、授業報告1編、年報と資料を構成内容としています。論文・授業報告をご執筆いただいた先生方、年報と資料を取りまとめたくださった編集委員の方々に感謝申し上げます。

論文

【研究論文】

日本語学習者の誤用に対する気づきの視線：誤用探索課題における視線分析より

.....吉 成 祐 子 3

【授業報告】

日本文化科目の工夫と課題：「日本文化へのいざない」「地域実験—岐阜を知る」

.....土 谷 桃 子 13

日本語学習者の誤用に対する気づきの視線¹

—誤用探索課題における視線分析より—

Japanese Language Learners' Awareness of Misuse:
Insights from Eye-Tracking Analysis Using Error Detection Quizzes

吉 成 祐 子

要旨：

本稿は、誤用を認知するプロセスとして視線の動きに注目し、学習者がどのように文を読み誤用に気づくのか、調査した結果の一部を報告するものである。中級・中上級レベルの日本語学習者と日本語母語話者を対象に、提示された短文から誤用を探して訂正する実験を行い、誤用を見つける際の視線の動きを分析した。分析対象とした誤用は「エアコンを閉める」のような、語の組み合わせが不適切なコロケーションである。誤用に気づく学習者と気づかない学習者の注視傾向（視線が一点に停留する回数、総停留時間）を比較した結果、誤用に気づく学習者は気づかない学習者より、有意に停留回数が少なく、総停留時間も短いことがわかった。さらに、助詞を含む語ごとに分けた領域への注視傾向を見ると、誤用の領域だけでなく、コロケーションで対となる語を含む領域、つまり誤用だと判断できる領域にも注視していることがわかった。日本語母語話者にも見られた結果であることから、誤用を認知する視線の動きは学習者特有のものではなく、一般的なものである可能性が考えられる。

1. はじめに

学習者の言語能力は、間違えることなく学習言語を運用しているかどうかで測られることが多い。正しく運用できるようになる過程には、何が誤用で何が正用かの理解や判断があると考えられる。誤用を産出しても自らがそれに気づき、訂正することができるようになれば、次第に間違えることのない言語運用が可能になる。このように考えると、学習者が自ら誤用に気づくことは言語習得の過程において必要なことであり、重要視されるべきことであると言える。しかし、誤用に気づくという認知過程を詳しく検証しているものは、あまりない。

実際、学習者にとって誤用の存在に気づくことは難しいようだ。教育の現場では、学習者の間違いを直接指摘するだけでなく、ヒントを与えて誤用に気づかせるという間接的な方法を用いて指導することも多い。それでも誤用に気づかない学習者や、再度同じ間違いをする学習者がいる。なぜ自分で誤用に気づけないのだろうか。どうすれば誤用に気づき、自己訂正ができるようになるのだろうか。これらを解明するためには、まず、誤用に対する気づきのプロセスを明らかにすることが必要である。

誤用を見もせず知覚することは不可能である。誤用を認知するにはそれに視線が向けられているはずである。つまり視線の動きは、誤用に気づいたと判断できる指標の一つであると考えられる。本稿では、視線がどこに、どのくらい停留するのかを測定・分析することにより、文章内

の誤用に気づく認知プロセスの解明を試みる。実験調査を行った結果の一部を報告し、誤用に気づくとはどのような視線の動きなのかを考察する。

2. 背景

文章を読む際の視線の動き（眼球運動）は、なめらかに文字を追うものではなく、視線が一点に停留する「注視」と、視線が次の場所へジャンプする「サッカード」から構成される。これらを視線分析装置で記録し解析することが、言語処理過程のメカニズムを解明する一つのアプローチであることが知られている。これまでの研究では、一回の停留で得られる情報の種類(Bradshaw 1975)、単語における視線の停留位置 (McConkie, Kerr, Reddix & Zola 1988)、停留位置と停留時間の関係 (Vitu, McConkie, Kerr & O'Regan 2001) などが調べられている。Rayner (1998) は、英語文の読みでは、サッカードは8文字程度、停留時間は約225msecであるという視線の動きを報告している。

日本語文の読みについても、視線の停留とサッカードが繰り返されるが、独自の文字を用いる日本語では、英語との違いが見られる。サッカードの大きさは通常の文章では2～5文字ぐらいで、停留時間はおよそ100～500msecの範囲にあるとするものや、漢字かな交じり文の読みについて、その有効視野は注視点を中心として約12文字、サッカードは約5～7文字、停留時間は約200msec (芋坂1998、斎田1993) と示しているものもある。また、日英語では停留位置に違いがあり、英語は語の中心に、日本語は語の先頭にあると言われている (Kajii, Nazir & Osaka 2001)。漢字はひらがなに比べて空間的な密度が高く、内容語の先頭は漢字であることが多いためである。

このように、言語によって傾向が異なる点もある眼球運動だが、その測定結果と文章理解との関わりについて研究したものが多い。Just & Carpenter (1980) は、人が文章を理解する際、名詞や動詞などの内容語に出会うたびに解釈を試み、その処理が完了するまで語に注視し続ける特徴があること、そのため、理解に時間がかかる語もしくは重要な語ほど停留時間が長くなることを指摘している。つまり、処理負荷の増大は停留時間の増加につながるということだ。Rayner (1998) は、読みの習熟度による変化に注目し、習熟度が上がると、サッカードは大きくなり、停留時間は短くなることを明らかにしている。しかし、先行研究の多くは英語話者の読みを対象としたものがほとんどであり、日本語話者の読みを対象とした研究例は少ない。さらに、日本語学習者についての研究は少なく (鈴木1998)、また、誤用への気づきに注目し、視線分析を行ったものは、管見の限り見当たらない。

日本語の誤用分析についてはこれまで多くの研究がなされてきたが、学習者が産出した誤用を対象とし、コーパスなどを用いてその傾向や誤用の要因を検討するものが多い (大山・小町・松本2016など)。教育にいかすための提言もあるが、そもそも学習者自身が誤用に気づかない限り、学習者による誤用の産出がなくなることはないだろう。自己訂正につながるものとして、誤用への気づきの過程を明らかにすることは重要な課題と言える。

3. 調査方法

誤用を認知する際の視線の動きを明らかにするため、日本語学習者を対象に、誤用探索課題を用いた実験調査を実施した。誤用探索課題とは、誤用を含む短文を読み、見つけた誤用を口頭で訂正するという課題である。以下、その実験方法について詳述する。

3.1 参加者

参加者は国内外の大学で日本語を学ぶ、国籍の異なる中級・中上級レベルの日本語学習者21名（男性9名、女性12名）である²。出身（ハンガリー、中国、インドネシア、ミャンマー、フランス、エジプト、コートジボワール、ベトナム、マレーシア、アフガニスタン）や年齢（19～30歳）は様々で、日本語学習歴（2～4年）や日本語能力試験の結果（N1～N3）にも違いがあるが、各大学の中級あるいは中上級レベルの日本語クラスに在籍している学生である。また比較分析のため、日本語学習者だけでなく、日本語母語話者である大学生4名（男性1名、女性3名）にも実験に参加してもらった。

3.2 実験内容

実験で使用したのは、誤用を含む短文から誤用を探し訂正する誤用探索課題である。誤用文は全部で16文あり、1文ずつ提示される。誤用の種類は様々で、助詞の誤用（例：スカートを汚れていますよ）、活用の誤用（例：働くながら、大学で勉強しています）、語の組み合わせが不適切なコロケーション（エアコンを閉めるのを忘れた）、文字表記の間違い（例：飲み物でビルが一番好きです）、文法・文脈の誤用（例：はじめは少し怖かったですから、今は大丈夫です）などに分けられる。本稿では、この16文のうちの一部（2文）の結果について報告する。

3.3 手順

視線計測にはTobii Pro Fusion（Tobii社製、サンプリングレート250Hz）を使用した³。提示する文は17.3インチのノートパソコンの液晶ディスプレイに1文ずつ写し出される。実験者は同席し、パソコンを操作しながら実験の手順を説明する。まず、参加者に対して眼球運動のキャリブレーションを行う⁴。次に、画面上に「今から短い文をいくつか読んでもらいます。それぞれの文に間違いがあったらどこが間違っているのか教えてください」という教示文を提示する。さらに答え方の練習として、「きのううちで ばんごはんが 食べました」という誤用を含む例文を提示し、答え方を確認する。その後、課題が始まる。参加者は各自のペースで1文ずつ回答していく。間違いが見つからなければ、その旨を実験者に伝え、次の文に移ることとした。

3.4 分析方法

本稿で分析の対象としたのは、下記の(1)(2)の不適切なコロケーション2文である。誤用箇所を下線で示している。

- (1) 部屋を でるとき、エアコンを しめるのを わすれた。（課題1）

(2) CDのこえが ちいさいので、おおきく してください。 (課題2)

課題1は「エアコンを消す」、課題2は「CDの音」が正しいコロケーションである⁵。なお、提示された文は、漢字の読みや意味理解に時間差が出ないように、初級レベルの漢字の使用にとどめている。

各文に対し、日本語学習者 (JL2) 21名分、日本語母語話者 (JL1) 4名分のデータを得ているが、視線の動きを分析するにあたり、それぞれの文は図1のように、助詞を含んだ語ごとに関心領域 (Area of Interest: AOI) を設定している。どちらの課題も五つの領域に分けられる。これら領域内での視線の動きを分析する⁶。

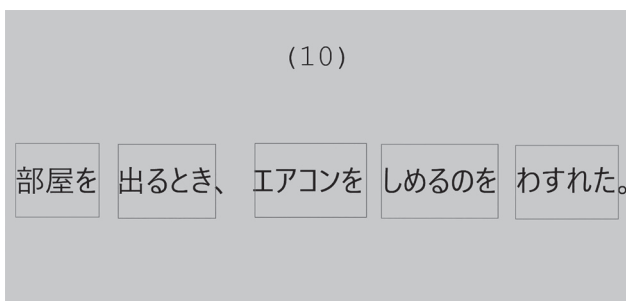


図1 1文内における関心領域 (AOI) の設定画面例 (課題1)

以下では、誤用探索課題の回答結果により、誤用の気づき有り／無しでグループに分け、グループ別に領域への停留回数と総停留時間を比較・分析する。なお、誤用に気づくまでの視線の動きを検証するため、参加者が誤用を指摘するまでの時間を誤用の探索時間とし、その間の視線の動きを分析対象とした。探索時間は、画面が切り換わって課題文が提示されてから、参加者が誤用について述べ始めるまでの時間であり、参加者によって時間の長さは異なる。JL2とJL1それぞれの探索時間の傾向についても4節で報告する。

4. 結果と考察

各課題における参加者の回答傾向 (誤用を指摘するまでの探索時間、正答率と誤用への気づきの有無)、そして領域内での注視傾向 (領域全体での停留回数と停留時間、各領域別停留回数と停留時間) の結果を見ていく。

4.1 誤用探索課題の回答傾向

4.1.1 誤用を指摘するまでの探索時間

実験では、参加者は各文の誤用を探し、訂正することが求められている。課題の誤用文が提示されてから、参加者が誤用を指摘し始めるまでの時間を「誤用の探索時間」とした。その探索時間において、日本語母語話者 (JL1) と学習者 (JL2) で差が見られた。課題別の各グループ平均探索時間の結果を図2に示す。

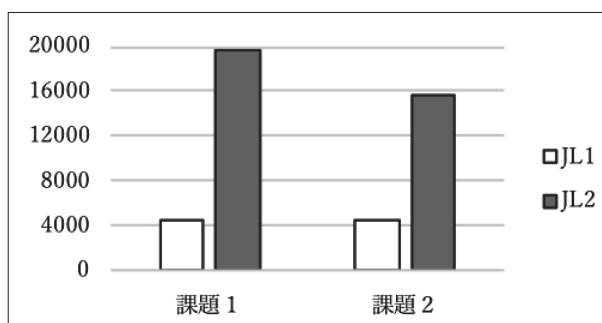


図2 課題別 日本語母語話者 (JL1) と学習者 (JL2) の平均探索時間 (msec)

JL1 (4名) の平均探索時間は、課題1が4411msec (標準偏差1775.48)、課題2が4546msec (標準偏差2967.25) で、JL2 (21名) は課題1が19585msec (標準偏差6812.32)、課題2が15552msec (標準偏差7557.92) であった。2要因 (グループ: JL1/JL2、課題: 課題1/課題2) の分散分析を行った結果、グループにのみ、主効果に有意な差が見られた ($F(1, 23)=18.24, p<.01$)。主効果とは平均差を生じさせる効果があることを示すものであり、どちらの課題であってもJL2のほうがJL1より、探索時間が有意に長いことを意味している。学習者は誤用を見つけるために、より時間がかかっていることがわかる。

4.1.2 正答率と誤用への気づき

次に、誤用に気づいたかどうか、誤用を正しく訂正できたかどうかに注目する。本稿で対象とする2文における正答率は、JL1は両課題とも100%、JL2は課題1が19.0%、課題2が23.8%であった。

JL2の詳しい回答結果を表1にまとめている。回答は、誤用に気づいているか気づいていないかで大きく二つに分けられる。「誤用の気づき有り」の回答は、正しく訂正されたもの (表中「○○」)、誤用であると思うが正しい答えがわからないと答えたもの (「○△」) である。一方、「誤用の気づき無し」となるものは、誤用ではない箇所を訂正しているもの (「××」、例: 部屋を出た時、エアコンを閉めるのを忘れた)、誤用を含む領域ではあるものの不要な訂正をしているもの (「×△」、例: 部屋を出る時、エアコンを閉めることを忘れた)、そして誤用はないと回答したもの (「×なし」) である。数値は21名中何名がその回答パターンに該当するのか、その人数と割合を示している。

表1 JL2の各課題に対する回答パターン別 回答人数 (回答割合)

	誤用の気づき有り		誤用の気づき無し			合計
	○○	○△	××	×△	×なし	
課題1	4 (19.0%)	1 (4.8%)	13 (61.9%)	2 (9.5%)	1 (4.8%)	21 (100%)
課題2	5 (23.8%)	0 (0.0%)	11 (52.4%)	0 (0.0%)	5 (23.8%)	21 (100%)

表1の「○○」に当たる正答率を見てわかるように、参加者が中級・中上級レベルの学習者だと考えると、誤用を見つけて訂正するという課題の結果は、あまりいいものとは言えない。正

しく誤用を指摘し訂正できたのは、両課題とも全体の2割程度と低い。また、正答したのは両課題とも中上級レベルは1名ずつで、コロケーションの誤用課題については、日本語レベルが高いため正答率が高いわけではなかった。また両課題とも正答だったのは1名のみであったことから、必ずしも個人差によるものとは言えないだろう⁷。対象となった誤用の表現は「エアコンを閉める」、「CDの声」という語の組み合わせが不適切なコロケーションであるが、どちらも初級で学ぶものである。国内の中級レベルの学習者に関しては、授業内でも取り上げていたものであった。コロケーションを知ってはいても、誤用として気づかないものである可能性も考えられる。

次節から、回答の正否だけでなく、誤用箇所気づいたかどうかをもとにグループを分け、注視傾向を探る。

4.2 領域内での注視傾向

4.2.1 領域全体での視線の動き

誤用に気づく際の視線の動きを確認するため、表1で示した、誤用に気づいた参加者「誤用の気づき有り」(両課題共に5名ずつ)と、気づかなかった参加者「誤用の気づき無し」(両課題共に16名ずつ)に分けて比較する。さらに、すべての誤用に気づいている日本語母語話者も含め、各グループの領域全体への注視傾向を見ていく。

図1で示したように、提示された文はディスプレイ画面の一部であり、視線は文以外の箇所にも向けられる。そこで、提示文への注視を分析するため、提示文ごとに設定した関心領域(AOI)(どちらの課題も五つ)の範囲内全体での注視傾向を確認する。これは各領域の結果を合計したのとなっている。注目した視線の動きは、領域への停留回数と総停留時間である。表2にグループごとの平均値をまとめている。

表2 各課題に対する気づき有無グループ別 停留回数(上)と総停留時間(下)の平均値

	日本語母語話者 (JL1)	日本語学習者 (JL2)	
		誤用の気づき有り	誤用の気づき無し
課題1	3.1回 582msec	9.2回 2389msec	11.9回 2855msec
課題2	2.9回 505msec	4.4回 640msec	10.2回 2397msec

表2を見ると、どちらの課題においても、日本語母語話者(JL1)の数値が最も小さいこと、日本語学習者(JL2)では、「誤用の気づき有り」のほうが「誤用の気づき無し」より、領域に停留する回数が少なく、時間も短いことがわかる。

JL2において、誤用の気づき有り無しで統計的な差があるかを確認するため、2要因(グループ:気づき有り/気づき無し、課題:課題1/課題2)の分散分析を行った。その結果、停留回数、総停留時間のどちらも、グループと課題それぞれに主効果が見られた(停留回数(グループ:F(1, 38)=9.24, $p<.01$ 、課題:F(1, 38)=5.54, $p<.05$)、総停留時間(グループ:F(1, 38)=8.43, $p<.01$ 、課題:F(1, 38)=8.30, $p<.05$))。これは、グループの違いも課題の違いも平均差を生じさせる要因となっていることを示している。つまり、課題によっても差はあるが、誤用に気づくグループのほうが気づかないグループより、統計的にも有意な差で、停留回数は少なく、総停留時間も短

いことが確認された。

この結果から、誤用に正しく気づける場合は、探索に時間がかからず気づくことができ、何度も注視する必要がないものだといえる。この傾向は、誤用に気づき正しく訂正できる日本語母語話者と同様である。一方、誤用に気づかないグループの結果を見ると、誤用を見つけられないからこそ、文全体を注視するのに時間がかかり、注視する回数も多く、時間をかけて誤用を探索している様子がうかがえる。

なお、誤用の気づき有無グループ別に探索時間を比較すると、どちらの課題も、誤用の気づき有りグループのほうが、より短かった。気づき有りグループ（5名）の平均探索時間は、課題1が16285msec（標準偏差5388.60）、課題2が9627msec（標準偏差4565.76）で、気づき無しグループ（16名）は課題1が20616msec（標準偏差6882.68）、課題2が17403msec（標準偏差7352.57）であった。2要因（グループ：気づき有り／気づき無し、課題：課題1／課題2）の分散分析を行った結果、グループの主効果にのみ有意な差が見られた（ $F(1, 38)=5.67, p<.05$ ）。課題に関わらず、誤用に気づくグループのほうが、探索時間が有意に短いことを意味する。これは、日本語母語話者と学習者全体を比較した結果と同様である。

以上、誤用に気づく学習者の視線の動き（停留回数や総停留時間）や探索時間の結果を見ると、気づかない学習者よりも日本語母語話者に近い傾向にあることがわかった。これは、学習者が誤用に気づくようになると、認知の処理速度の面でも、より母語話者に近づいていくことを示唆している。

4.2.2 各領域への視線の動き

次に、文内における領域別の注視傾向に注目する。課題1、2の提示文は、どちらも五つの領域に分けられる。誤用と認識する視線の動きを分析するため、全員が誤用に気づき正しく訂正している日本語母語話者グループ（4名）と、日本語学習者で「誤用の気づき有り」グループ（5名）を対象として分析する。表3は、各課題の領域別に見た注視傾向（停留回数、総停留時間）を、グループごとに示したものである。表3-1は日本語母語話者（JL1）、表3-2は誤用に気づいた日本語学習者（JL2-K）の結果である。最も数値の高い領域は濃い網掛け、2番目に数値の高い領域は淡い網掛けで示している。

表3を見ると、両グループ・両課題ともに、共通した注視傾向が見てとれる。それは、誤用のある「誤用領域」（課題1は「しめるのを」（AOI4）、課題2は「こえが」（AOI2））において、停留回数が最も多く、総停留時間が最も長いという共通した傾向である。さらに注目したいのは、

表3-1 各課題に対する領域別 停留回数（上）と総停留時間（下）の平均値（JL1）

課題1	AOI1 部屋を	AOI2 出るとき	AOI3 エアコンを	AOI4 しめるのを	AOI5 わすれた
停留回数	1.8回	2.0回	5.0回	6.0回	0.5回
総停留時間	325msec	276msec	912msec	1314msec	81msec
課題2	AOI1 CDの	AOI2 こえが	AOI3 小さいので	AOI4 大きく	AOI5 して下さい
停留回数	2.0回	5.8回	3回	2.0回	1.5回
総停留時間	446msec	1022msec	524msec	308msec	227msec

表 3-2 各課題に対する領域別 停留回数（上）と総停留時間（下）の平均値（JL2-K）

課題 1	AOI 1 部屋を	AOI 2 出るとき	AOI 3 エアコンを	AOI 4 しめるのを	AOI 5 わすれた
停留回数 総停留時間	5.4回 1635msec	6.4回 1659msec	12.8回 2525msec	17.0回 4962msec	4.4回 1163msec
課題 2	AOI 1 CDの	AOI 2 こえが	AOI 3 小さいので	AOI 4 大きく	AOI 5 して下さい
停留回数 総停留時間	4.0回 848msec	8.4回 1758msec	3.8回 711msec	3.4回 698msec	2.2回 423msec

コロケーションの一部であり、誤用であるかどうか判断できる「手がかり領域」（課題 1 は「エアコンを」（AOI3）、課題 2 は「CDの」（AOI1））では、どちらの数値も 2 番目に高いことである（JL1の課題 2 の結果を除く。この点に関する考察は後述する）。ただし、これはグループでの平均値であり、個人別に数値の高い領域を確認すると、必ずしも表 3 の結果と同様の順位で注視しているわけではなかった。

個人別に領域の注視順位を見てみると、グループ、そして課題によって結果が異なっていた。JL2-K（5 名）に関しては、課題 1 では、停留回数・総停留時間のどちらかで、誤用領域で最も数値が高く、どちらかで 2 番目に手がかり領域で数値が高かった。課題 2 では、1 名を除き、停留回数・総停留時間ともに、誤用領域で最も数値が高かった（1 名は手がかり領域が最も高かった）。しかし、うち 2 名が、2 番目に手がかり領域へ注視していたわけではなかった。また、JL1（4 名）に関しては、課題 1 では、誤用領域と手がかり領域の両方に注視しているが、その順位が個人によって異なる。そして課題 2 では、どちらにも注視していない 1 名、手がかり領域に注視していない 1 名がいた。このように、個人別に数値を確認すると、全員が同様の注視傾向を示す結果ではなかった。

しかし個人別に分析したとしても、誤用の気づき無しグループほどばらつきのある結果ではなかったことを指摘しておきたい。誤用に関わる領域（誤用領域・手がかり領域）のほうが、その他三つの領域よりも注視されていることが多いという共通した傾向がある点が、気づき無しグループとは大きく異なる。気づき無しグループでは、そもそも共通した注視傾向は見られなかった。例えば課題 1 において、正しい表現である「出るとき」（AOI2）を「出たとき」と訂正をしていた参加者 5 名の各領域の数値を見てみると、最も注視している領域や順位に共通した傾向はなかった。つまり、同じような回答をしたからといって、同じような注視傾向があるわけではなかったという点が、誤用の気づき有りグループの傾向とは異なる。また、課題 1 の気づき無しグループのうち、誤用領域（AOI4）内の訂正ではあったものの、誤答（「閉めたのを」）や不要な訂正（「閉めることを」）だった 8 名のうち、7 名がこの領域で最も総停留時間が長かったが、必ずしも 2 番目に手がかり領域（AOI3）の数値が高いというわけではなかった（半数以下）。この点が誤用の気づき有りグループの傾向とは異なる。これらのことから、誤用を認知し訂正できるのは、誤用を判断する手がかりの領域に注視しているからこそだと考えられる。

最後に、JL1の課題 2 の結果において、手がかり領域（「CDの」AOI1）で 2 番目に高い数値が見られなかったことについて考察する。これは、課題 2 の提示文の特色によるものだと考えられる。手がかり領域が文頭であったこと、その領域の文字数が 3 文字であったこと、そして文字が

アルファベットであったことが関わっている。日本語文の読みについて先行研究で指摘されているように、日本語母語話者の有効視野は、注視点を中心として約12文字と広い(芋坂1998、斎田1993)。そのため、文頭に注視点を置かなくても、3文字のAOIを認知することが可能だったと考えられる。また日本語文の場合、英語と違い、停留位置は語の先頭にあるとされているが、これは漢字の内容語であるためである(Kaiji, Nazir & Osaka 2001)。「CD」というアルファベットについてはこの傾向に当てはまらない。このような課題2の特徴が原因となり、注視点が設定した領域から外れ、JL1が手がかり領域に注視しているという結果が得られなかったのではないだろうか。これは、個人別に見た結果でも、課題2で異なる傾向が多く見られたことにも関わっているだろう。このような誤用の位置や文字数との関わりは興味深い点であり、さらなる検証が必要である。

JL1にも当てはまるとは言いきれない点はあったが、コロケーションの誤用に気づく視線の動きの特徴として、手がかり領域にも注視するという傾向は、誤用の気づき無しグループには見られないものであった。このことから、誤用に関わる領域に注視することは、誤用に気づく認知プロセスの特徴の一つであると言えるだろう。

5. おわりに

本稿では、誤用に気づく学習者と気づかない学習者の違いについて、視線の動きに注目して分析を行った。比較を行うことにより、誤用に気づく視線の動きとして、誤用箇所だけでなく、誤用だと判断できるところにも注視するという傾向を明らかにした。また、この傾向は、提示文の特色上、異なる結果も見られたが、日本語母語話者の視線の動きにも当てはまるものであり、学習者特有の傾向ではなく、より一般的な誤用に気づく認知プロセスである可能性が考えられる。

本稿で示したのは、誤用に気づく認知過程を明らかにするための調査結果の一部の報告に過ぎない。様々な種類の誤用がある中で、コロケーションという語の組み合わせに関わるものに限定した結果であり、また、正答・誤答の回答数が量的に不足している点は否めない。しかし、誤用への気づきを視線の動きで分析すること、その動きに誤用への気づきとの関わりがあることを示すことができた。今後は、誤用の種類や数、データ数などを増やし、より詳細で一般化された「誤用に気づく認知プロセス」である視線の動きを解明すべく、研究を進めていきたい。

注

- 1 本稿は、2024年3月8日～10日に行われた社会言語科学会第48回大会で発表した内容を加筆・修正したものである。
- 2 実験は、ハンガリーのエトヴェシュ・ロランド大学、日本の岐阜大学において、それぞれの大学で日本語を学ぶ大学生・大学院生を対象に実施した。
- 3 サンプルングレートとは、視線計測装置が1秒間に得られるデータ数を指す。サンプルングレートが高くなるほど眼球の動いた経路を正確に算出することができるものである。文章読解における停留に関する眼球運動の研究では、60Hz～250Hzのサンプルングレートの計測装置が使用されることが多い。なお、停留点を検出するための判断基準である、停留状態や停留時間の条件は、研究者によって様々であり、統一的な条件は確立されていないのが現状である。

- 4 キヤリブレーションとは、正確に視点を算出するために、被験者の目の幾何学的特徴を取得するプロセスである。眼球の形状、光の屈折、反射特性に関する情報からモデルを構築し、視点の位置を計算する。視線計測装置に備わっている機能である。
- 5 課題1において「しめる」を誤用箇所としているが、「ドアをしめるのを忘れた」と訂正することも可能である。ただし、このような訂正は見られなかったため、「しめる」を誤用箇所とした。
- 6 データの分析は、視線データ解析用ソフトウェアである「Tobii Pro ラボ」を用いて行った。
- 7 本稿が対象とする二つの課題については、差が見られなかったが、すべての課題（16問）に対する正答の平均値には、中級・中上級レベルでは違いがあったことを報告しておく。中級レベル17名の正答平均値は6.12（標準偏差2.60）、中上級レベル4名の平均値は9.75（標準偏差3.40）であった。

謝辞

本研究はJPSS科研費22K00663の助成、令和4年度岐阜大学若手・中堅研究者海外研修プログラムの助成を受けたものである。

参考文献

- Bradshaw, J. L. (1975). Three interrelated problems in reading, *A Review. Memory & Cognition*, 3 (2), 123-134.
- Just, M. A. & Carpenter, P. A. (1980). A theory of reading: From eye fixations to comprehension, *Psychological Review*, 87(4), 329-354.
- Kajii, N, Nazir, T. A., and Osaka, N. (2001). Eye movement control in reading unspaced text: The case of the Japanese script, *Vision Research*, 41(19), 2503-2510.
- McConkie, G. W., Kerr, P. W., Reddix, M. D., and Zola, D., (1988). Eye movement control during reading: I. The location of initial eye fixations on words, *Vision Research*, 28(10), 1107-1118.
- Rayner, K. (1998). Eye movements in reading and information processing: 20 years of research, *Psychological Bulletin*, 124, 372-422.
- Vitu, F., McConkie G. W., Kerr, P. W., and O'Regan, J. K., (2001). Fixation location effects on fixation durations during reading: An inverted optimal viewing position effect, *Vision Research*, 41(25-26), 3513-3533.
- 荳阪直行(1998)「移動窓による読みの実験的研究：周辺視と読みの関係」荳阪直行(編)『読み—脳と心の情報処理』朝倉書店, 17-41.
- 大山浩美, 小町守, 松本裕治 (2016). 日本語学習者の作文における誤用タイプの階層的アノテーションに基づく機械学習による自動分類, 自然言語処理, 23-2, 195-225.
- 斎田真也 (1993)「読みと眼球運動」荳阪良二・中溝幸夫・古賀一男(編)『眼球運動の実験心理学』名古屋大学出版会, 167-197.
- 鈴木美加 (1998). 初級後半の学習者は文章をどう読むのか：アイカメラによる文章読解中の眼球運動の記録, 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, 24, 65-84.

日本文化科目の工夫と課題

—「日本文化へのいざない」「地域実見—岐阜を知る」—

Ingenuity and issues of Japanese Culture Classes:
“Easy Steps to Japanese Culture”, “Local Field Study—Discover Gifu”

土 谷 桃 子

要旨：

本稿は、2023年度秋学期に筆者が初めて担当した日本文化科目「日本文化へのいざない」と「地域実見—岐阜を知る」の授業報告である。前者は、受講者の日本語レベルに幅あることに苦慮しつつ、主として既存の日本文化ワークショップを活用して行った。後者は、岐阜地域ならではの文化を、事前講義と現地を訪問しての実体験を組み合わせたもので、日本語中上級レベルの学習者を対象としたものである。今後の課題も付記する。

1. 日本語・日本文化教育センターの日本文化科目

岐阜大学日本語・日本文化教育センター（以下日文センター）は、ゼロ初級から中上級レベルまでの日本語クラスを実施している。それらと並行して、日本文化科目も数科目提供している。日本文化科目は、主として日文センター所属学生（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）¹および日本社会文化プログラム履修生（以下社会文化）²）を対象としたものである。

日研生は、文部科学省奨学金を受給する1979年創設の国費留学生制度のひとつである。本学では、2001年度から日研生を受け入れている。大使館推薦・大学推薦の国費留学生に加えて、学術交流協定校との学生交換枠内での私費留学生も日研生として受け入れていることが本学の特徴である。日本語レベルは、日本語能力試験N2相当以上を求めている。

社会文化は、学術交流協定校から受け入れる交換留学生のうち、日文センターが受け入れ部局となった学生を対象とするプログラムである。日本語レベルは問わず、半年または1年の留学で日本語と日本文化を集中的に学びたい学生を想定している。日本語レベルは、初級から日研生と同等の中上級までの学生が混在している。

本稿で取り上げる日本文化の2科目（日本文化へのいざない、地域実見—岐阜を知る）は、担当教員の退職等により2023年度秋学期より筆者が担当となった科目である。「日本文化へのいざない」は通年科目（春・秋学期、または秋・春学期）³、「地域実見」は単学期（秋学期）の科目である。受講者の日本語レベルがさまざまであったり、大学外・教室外での活動を織り込む必要があったり、日本文化科目ならではの工夫が必要であった⁴。以下、各科目について2023年度秋学期の概要、実施内容、工夫、課題等について記す。

2. 日本文化へのいざない

「日本文化へのいざない」（以下「いざない」）は、2022年度までは学外講師を迎えて茶道を学ぶ春学期開講科目で、受講対象者は社会文化のみであった。2023年度に担当教員（学外講師から筆者へ）と受講対象者（社会文化に日研究生を加える）が変更された。2023年度春学期は試行期間とし、日研究生のコース開始の秋学期から筆者が本格的に担当した。概要等は以下の通りである。

表1 「日本文化へのいざない」 概要・授業内容

概要（シラバスより）	
日本文化を、実際の体験と講義を通して学ぶ科目である。取り上げる内容は、能楽（能・狂言）、雅楽、茶道、郡上踊り（岐阜県郡上市に伝わる風流踊り、ユネスコ無形遺産）等である。その文化が育まれた背景や自国の類似の文化事象との比較等について考察を深める。	
受講対象者	日研究生（6名）・社会文化（9名）
開講学期	秋学期および春学期（通年科目）
授業内容（秋学期）	① 日本について（講義） ② 岐阜県について（講義） ③ 日本の伝統的な文化・平安時代・十二単とは（事前講義） ④ 十二単ワークショップ ⑤ 平安時代・雅楽とは・『源氏物語』とは（事前講義） ⑥ 雅楽ワークショップ ⑦ 郡上市・郡上踊り・ユネスコ無形文化遺産とは（事前講義） ⑧ 郡上踊り講座（学外研修）
授業内容（春学期） （2024年度春学期予定） ⁵	⑨ 郡上市・郡上踊りとは（事前講義） ⑩ 郡上踊りワークショップ ⑪ 茶道講座（講義及び体験） ⑫ 能楽（能・狂言）とは（事前講義） ⑬ 能楽（能・狂言）ワークショップ ⑭ 社会文化修了レポート指導 ⑮ 社会文化修了レポート指導

授業内容について順を追って説明する。10月留学開始の学生が大半であったため、最初に①日本、②岐阜についての講義を行った（丸数字は表1に対応）。①では、日本の地理、季節、年中行事を紹介し、火山が多く地震が頻発すること、緊急地震速報や非常用備品の話題も提供した。②では、岐阜県統計課が公開している「統計からみた岐阜県全体の現状」⁶からスライドを取捨選択して活用し、岐阜県の地理、人口、文化、名産品等を取り上げた。

表1③以降が、日本文化に焦点を当てた内容となる。筆者は後述の「地域実見—岐阜を知る」も2023年度秋学期から新規担当で、両科目をゼロから構築するのは困難であったため、従来から実施している日文センターの「日本文化ワークショップ」⁷を最大限生かすことにした。2023年度と同ワークショップは、郡上踊り（5月）、能楽（能・狂言）（7月）、十二単（11月）、雅楽（12月）を開催したが、このうち、秋学期の④十二単と⑥雅楽をいざないに織り込んだ。それぞれについて③⑤事前講義を行い、ワークショップ後にはレポート提出を課した。学外研修としては、

日文センターが長らく親密な関係を結んでいる岐阜県郡上市を訪問し、⑧郡上踊り講座を行った。この講座についても、⑦事前講義を実施し、終了後にレポートを提出させた。

次に、上記の内容を行うに当たっての工夫と困難について述べる。最も懸念されたのは、受講者の日本語レベルのばらつきであった。日本語が全くゼロの学生はいなかったものの、初級レベルからN2相当以上までの学生が同一の授業を受ける。①初回講義は、文字での情報提供についてこれない学生が複数いたため、②岐阜についての講義では、前述の岐阜県統計局のスライドを用い、文字より図で情報を得られるようにした。スライド視聴前に岐阜についてのクイズ（「岐阜県の人口は、全国で何位でしょうか」「岐阜県の生産物のうち、全国シェアが1位のものは何でしょうか」等）の答えを推測させてから、スライドを見せた。白川郷や飛騨牛といった学生たちの知っている話題も多く、自身がすでに訪問した場所について話がはずんだり、全国1位の喫茶店支出を誇る岐阜市のトピックでは、大学近くにくくつもある喫茶店に目を輝かせたりしていた。初級レベル学生には難しい漢字にルビを振る、辞書を貸し出す、適宜英語で説明するといった配慮もした。

実体験を伴うワークショップが好評であることは、過去の経験から確信していた。④十二単ワークショップは、学外の着付け講師に十二単の着付けを依頼した。着付けモデルは、日研生から選び、着付けを進める中で衣装の色や着付けの手さばきについて教員が随時説明した。③事前講義では、来日間もない学生が多いタイミングだったため、まず日本のいわゆる伝統文化を紹介した後、日本の歴史（主に平安時代）と和服に話題を広げて講義を行った。⑥雅楽ワークショップは、雅楽の普及活動を行っている団体に依頼した。内容は、雅楽の鑑賞、雅楽楽器の伝来と紹介、衣装の着付けと楽器の体験であった。⑤事前講義では、前月の十二単ワークショップで平安時代について学習済であったため、その復習と『源氏物語』の紹介をした。

それぞれのワークショップを、ただ「楽しかった」で終わらせないために、興味深かったこと、初めて知ったこと、さらに知りたいことについて、各自の日本語レベルで事後レポートを出させた。レポート提出前に日本人学生チューター（国際交流ラウンジチューター）⁸に必ず日本語チェックしてもらうことも必須とした。

苦心したのは③⑤の事前講義である。日本の歴史について、日研生は別科目（日本文学概論）⁹で学ぶが、社会文化はほぼ知識がなく、「平安時代」という語を聞いたことがない、または聞いたことはあるが知識はない学生がほとんどである。①②の反省から、学生に身近なことから取り上げようと、いわゆる日本の伝統文化（能楽、茶道、相撲等）を紹介してから、着物に話を移し、平安時代の十二単につなげた。また、2023年度秋学期は、たまたま両ワークショップとも平安時代の内容であったため、③と⑤の毛色をどう変えるかにも頭を悩ませた。⑤であまり詳しく雅楽楽器の紹介をしてしまうとワークショップ当日の驚きと楽しさが減ってしまう。そこで、平安時代の復習、雅楽の概要説明の後、苦し紛れではあったが『源氏物語』を取り上げた。『源氏物語』はただのプレイボーイの色恋話と捉えられがちだが、それだけではないという話をしたところ、それが興味深かったと事後レポートに書いてきた学生がいた。

学外活動は、⑧郡上踊り講座を郡上市にて行った。午前は座学で郡上市在住の講師から郡上踊りの歴史と歌詞を学び、午後は現地の郡上踊りのお囃子グループの協力を得て、楽器体験と踊りの実習を行った。郡上踊りは、岐阜県郡上市で行われる日本最大・最長の盆踊りと称される民族芸能である。約400年の歴史を有し、2022年にユネスコ無形文化遺産に認定された日本の風流踊

りのひとつである。⑦事前講義では、郡上市・郡上踊りに加えて、ユネスコ無形文化遺産について話した。岐阜県内では、郡上踊りを含む風流踊り以外にも、本美濃紙の手すき技術や高山祭等の屋台行事がユネスコ無形文化遺産に認定されている。事前講義の内容が講座当日午前の内容と重ならないように留意した。

郡上での学外活動は、日研究生・社会文化全員揃って出かけるという遠足的な楽しさに満ちたものではあったが、午前の講義については改善の余地が多くある。日文センターは従来から郡上市との関係が深く、日研究生や社会文化がたびたび訪問しているが¹⁰、それらは同市における観光振興（観光課）や人材育成（人事課）の事業に協力するという形であり、今回のような純粋な教育目的の講義は初めてであった。日本の歴史の知識が乏しく、文語や方言の混じる郡上踊りの歌詞の内容を類推する日本語力もない学生にとっては、講義は非常に難しいものとなってしまった。視覚資料の活用がなかったことも悔やまれる。次回以降同様の内容を行うのであれば、より平易な内容に絞る、事前講義で扱う部分と当日講義で取り上げる部分を切り分けて段階を踏めるようにする、現地講義担当者との事前打合せを綿密に行う、日本語力のある学生のみを対象とするといった改善策を講じる必要があると痛感した。午後の郡上踊りの楽器と踊りの体験は好評で、春学期まで留学を続ける学生は、ぜひ本場の郡上踊りに参加したいと口々に言っていた。

2023年度秋学期の「いざない」では、日本語力にばらつきがあり、かつ日本の歴史について基本的な知識のない学生たちにどう教えるか、内容に興味を持たせるかにはどうしたらいいか、苦慮し続けた。実演や実体験の魅力をより強めるような、そしてただ表面的に楽しいだけではない学びを与えられるような工夫をさらに重ねなければならない。

2024年度春学期の予定に言及しておく。筆者は、春学期は⑨～⑬の事前講義＋ワークショップを担当する。⑩郡上踊りワークショップでは、浴衣を着用し、郡上踊りを学ぶ。着付け、踊り指導とも県内から講師を招く。⑨事前講義では、日本のお盆・盆踊り、郡上踊りの歴史等を取り上げる予定だが、秋学期の⑦⑧との重複をどうするかは要検討である。郡上踊りの実際を楽しむ⑨⑩を行ってから、⑦⑧のような講義形式で深く学ぶほうが順序として適切かもしれない。⑪は、茶道指導の経験がある本学教員に依頼する。⑬能楽（能・狂言）ワークショップは、観世流シテ方と大蔵流狂言方の現役能楽師を招聘し、能・狂言の鑑賞、能楽の歴史、能と狂言の違い（所作と面）、能楽の楽器、能楽の衣装といった内容が含まれる。⑫事前講義では、日本の歴史の概要、日本の演劇の紹介、能と狂言の主な違いを取り上げるつもりである。

「いざない」に関して、授業内容や方法と別に今後大きな懸念事項となるのは、予算削減が続く中での費用負担である。外部講師によるワークショップや学外活動にかかる費用を今後も負担し続けられるかは不透明である。また、半年のみ在籍する社会文化に対する成績・単位の問題もある。「いざない」は通年授業であるため、現状では半年のみ在籍の社会文化には成績も単位も出ないが、今後もこのままで良いかどうか、再検討が必要になるかもしれない。

3. 地域実見—岐阜を知る

2022年度末に担当教員が定年退職したため、筆者が引き継いだ科目である。「地域実見」（以下「実見」）という科目名に謳われているように、岐阜県内各地を実際に訪れて学ぶ科目である。2023年度秋学期に訪問した5ヶ所は以下の通りである。下表の丸数字は訪問場所と内容を示すも

ので、授業回数を示すものではない。

表2 「地域実見」概要・授業内容

概要（シラバスより）	
岐阜地域は日本列島の中央に位置して穏やかな気候に恵まれ、特色ある文化をはぐくんで、それを現在に受け継いでいる（日本遺産第1号にも認定される）。この授業では、岐阜地域の歴史や文化について講義を聞くのみならず、史跡・博物館等を実際に訪問することにより、体験的に地域認識を深める。	
受講対象者	日研生（6名）
開講学期	秋学期
授業内容（秋学期）	① 岐阜市歴史博物館（三英傑と岐阜・岐阜の歴史） ② 地歌舞伎公演（岐阜の地芝居（地歌舞伎） ¹¹ ） ③ 岐阜県防災センター（日本・岐阜の災害と防災） ④ うかい歩き（岐阜と鶺鴒） ⑤ イチゴ農園（岐阜市の農業・岐阜のイチゴ）

岐阜の歴史・文化、そして岐阜の今を知ってほしいと考えて選んだ訪問地①～⑤である。

① 岐阜市歴史博物館

織田信長や関ヶ原の合戦は、岐阜の歴史や観光において外せないポイントである。2023年度は、タイミングよく岐阜市歴史博物館¹²で10月7日から11月19日まで特別展「天下統一 信長・秀吉・家康と岐阜」が開催されていたため、それに合わせて事前講義と博物館訪問を行った。日研生は、他の留学生に比べれば日本に関する知識があるが、三英傑（信長・秀吉・家康）の名前は聞いたことがあるという程度で、事前講義では基本的なことから説明する必要があるがあった。博物館見学当日の反省としては、充実した展示品に留学生がついていけなかったことがある。注目すべき展示品を筆者があらかじめピックアップしておき、それらについて説明を加えながら見せないと、視線がただ展示品の上を滑ってしまう。事前講義のみならず、当日も展示品の丁寧な見せ方を工夫しなければならないと猛省した。

この三英傑の特別展は博物館の1階で行われ、2階の総合展示室には岐阜の歴史を古代から現代まで示す常設展示がある。日研生は2階も見学し、別科目（日本文学概論）で学んだ日本の歴史を復習することができた。

岐阜市歴史博物館は、総合展示室のリニューアルが計画されている（2025年度施工、2026年度リニューアルオープン予定）。市民に加えて観光客の来館も想定した、信長や戦国時代を強化した展示になると聞いている。より充実した展示を期待している。

② 地歌舞伎公演

岐阜地域は、地域の人々（素人）が演じる地芝居（地歌舞伎）が多く残る地である。このユニークな岐阜の文化を取り上げた。2023年度は「清流の国ぎふ 地歌舞伎勢揃い公演（「清流の国ぎふ」文化祭2024さきがけプログラム）」¹³が行われていた。このプログラムは、県内各地に散在する歌舞伎保存団体が、岐阜市のぎふ清流文化プラザ¹⁴で順次公演するものであった。そのうち、11月12日の高雄歌舞伎・気良歌舞伎（いずれも郡上市の保存団体）の公演を観劇した。事前講義で日本の演劇の歴史、特に歌舞伎（大歌舞伎と地歌舞伎）を詳しく説明した。歌舞伎についての学生

の知識は、顔にすごい化粧をして古い日本語を使うという程度だったため、基本事項から説明し、公演演目（弁天娘女男白浪・稲瀬川勢揃いの場、奥州安達ヶ原・三段目袖萩祭文、菅原伝授手習鑑・寺子屋）の概要も紹介した。演目の事前知識がないと理解できないというのは、留学生に限らない。観劇後、芝居の言葉が理解できなかったという感想はやはりあったが、事前にストーリーが分かっていたことや、当日イヤホンガイドがあったことで、ある程度の理解はできたようである。

③ 岐阜県防災センター

従来全学で行われていた留学生対象の防災訓練が、コロナ禍を経てなくなったため、地震大国日本でどのように防災を心がけるべきかを取り上げなければと考えて選んだ訪問場所である。事前講義では、地震の起きるメカニズム、過去の日本の大地震（1891年の濃尾地震について特に詳しく）、地震発生時の行動、防災の心がけについて話した。一度も地震に遭遇したことのない学生もあり、講義だけではいまひとつの反応であった。しかし、防災センターで地震体験、煙室避難体験をし、防災用品の数々を見ることで、我がこととして感じるようになった。2024年1月1日の能登半島地震では、岐阜も震度4の揺れを観測したが、その時岐阜にいた日研生から、防災センターで地震のことを勉強していたからパニックにならずに済んだと聞いた。防災は、日研生に限らず大学全体として学ぶ機会を再度設ける必要があるだろう。河川が多く水害災害に見舞われることの多い岐阜の災害の特徴も取り上げる必要を感じている。

④ うかい歩き

岐阜の観光の目玉のひとつに、長良川鵜飼がある。長良川鵜飼の実施期間は、毎年5月11日から10月17日であるため、10月留学開始の日研生を連れていくには日程的に厳しく、また最も安価な乗合船でも1名3,500円という費用のハードルも高い。そこで、鵜飼が行われない期間も長良川うかいミュージアム¹⁵で毎月第2日曜日に開催している「うかい歩き」に参加することにした。「うかい歩き」では、ボランティアガイドとともに鵜匠の家や鵜飼に縁のある地域を回り、ミュージアムの展示の説明もしてもらえる。学生たちは積極的にガイドに質問をしながら歩き、ぜひ春には鵜飼を見に来たいという気持ちを高めていた。事前講義では、鵜飼の歴史や文化的な価値について説明した。岐阜市は、鵜飼のユネスコ無形文化遺産登録を目指しているが、そのためにどのような強みと弱点があるかを事後レポートとして考えさせた。

⑤ イチゴ農園

岐阜における産業を何か取り上げたいと考えていたところ、偶然本学応用生物科学部卒業生が市内でイチゴ農園を営んでいることを知り、協力を依頼したところ快諾を得た。事前講義も担当してもらい、岐阜地域における農業、新規就農者へのサポート、岐阜ブランドのイチゴ、イチゴの生態など、現職者ならではの話を聞くことができた。農園訪問では、イチゴ狩りを楽しみながら、イチゴの味や香りが品種によって異なることや、都市部における農業における工夫、自国おイチゴや農業との比較などを学び、考えた。

「地域実見」に、岐阜の歴史・文化と岐阜の今の両方を盛り込みたいという意図は、ある程度

達することができたと考えている。一方で、限られた回数で両方を扱おうとしたため、焦点がぼやけた感もある。訪問場所を1、2ヶ所増やすことも考えたい。

本科目で最も苦勞し時間がかかったのは、訪問場所の選定と訪問の段取り手続きである。訪問候補地探索は現在も継続中である¹⁶。訪問地決定後は、現地の関係者との折衝、交通手段の確保手続き等が必要で、教室で行う通常授業とは異なる煩雑さがある。

現在は、日本語力の高い日研生だけを対象として本科目を提供しているが、今後は、より多くの本学留学生に岐阜地域の文化を学ぶ機会を提供する必要があるかもしれない。地域自治体や組織の力を借りながら、長い目で将来を見据える必要がある。

4. 今後の課題

「いざない」「実見」の両科目の今後の課題（授業内容以外）を列挙して本稿を終える。

① 異なる日本語レベル

当然のことながら、日本語レベルが中上級で揃っている日研生のみが対象の「実見」のほうが、初級から中上級までのさまざまな日本語力の学生が受講する「いざない」よりやりやすいし、内容を深めることもできる。しかし、日本文化を学ぶ門戸を広く開く意味は大きい。提示資料や補助的な言語使用を工夫しながら、初級レベルの学生には分かりやすく、同時に日本語力が高い学生も満足できるような授業をするにはどうしたらよいか。次回以降も試行錯誤を重ねる。

② 受講対象者の拡大

本学の日本語研修コース（大学院生、研究生、交換留学生が受講できるコース）¹⁷では、近年、ゼロ初級から初級レベルの日本語を週に数コマ（1コマ＝90分）のみ学ぶクラスの希望者が増えている。以前は、専門研究に入る前にまず日本語を集中的に学んでいたのだが、最近は、専門研究は英語で行うので日本語は研究の合間に少しだけと考える学生が増えているようである。しかし、日本語はあまり学ばない学生も、日本文化に対する興味はある。日文センターの日本文化ワークショップは、全学の学生に機会を与えるものであるが、回数が限られている。「いざない」や「実見」のような科目や機会を、幅広く提供する必要があるかもしれない。また、近年重要性がますます増している多文化間共修（国際共修）の中に日本文化・地域文化の学びを位置づけることも可能であり、魅力的である。

③ 費用

上記2.で述べたが、講師への謝金、学外活動費用の捻出が年々厳しくなっている。日文センター予算以外からの支出の可能性を探ったり、費用のかからない内容に切り替えたりしていかなければならない。前項②で述べたような、全学の留学生を対象とするものであれば、日文センター単独予算以外からの経費補完を得られる可能性が高まるだろう。

注

1 日本語・日本文化研修コース：<https://www.global.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourse/>

- 2 日本社会文化プログラム：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jscprogram/>
- 3 「日本文化へのいざない」を履修する社会文化は、学生によって留学開始が春または秋学期となるため、どちらの学期からでも始められるようにしている。本稿では2023年度秋学期について述べる。
- 4 この2科目に加えて、筆者は日研生対象の「日本文学概論」（日研生対象）も担当した。同科目概要：文学には、その国の歴史や思想が自ずから現れる。この授業では、まず文学を支える文字についての考察をし、その後、時代に即して貴族の文学・武士の文学・町人の文学を概観し、それぞれの特徴や代表的な作品について学ぶ。学期後半には近現代小説を取り上げ、その読解を通して日本語力と鑑賞力を磨く。
- 5 2024年度春学期の授業内容は、本稿執筆時はまだ確定していない。⑨～⑬は筆者が担当し、⑭⑮は社会文化担当教員による指導となる予定である。
- 6 岐阜県統計課「統計からみた岐阜県・市町村の現状」概要版：<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/371430.pdf>、詳細版：<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/371432.pdf>
- 7 日文センター日本文化ワークショップ：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/events/workshops/>
- 8 日文センター日本人学生チューター：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/about/tutors/index.html>
- 9 注4参照。
- 10 日文センター地域貢献活動：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlscourse/community/>
- 11 「地歌舞伎」は、素人による歌舞伎を指す、岐阜で使用されている名称である。一般には「地芝居」（ただしこの場合は、歌舞伎以外の芝居も含む）を用いる。
- 12 岐阜市歴史博物館：<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>
- 13 清流の国ぎふ 地歌舞伎勢ぞろい公演：<https://seiryu-plaza.jp/site/jikabuki/>
- 14 ぎふ清流文化プラザ：<https://seiryu-plaza.jp/>
- 15 長良川うかいミュージアム：<https://www.ukaimuseum.jp/>
- 16 2023年度秋学期訪問地以外に以下の県内各地を下見した（順不同）。奥の細道むすびの地記念館(<http://www.basho-ogaki.jp/>)、内藤記念くすり博物館 (<https://www.eisai.co.jp/museum/information/index.html>)、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館 (<http://www.sorahaku.net/>)、岐阜関ヶ原古戦場記念館 (<https://sekigahara.pref.gifu.lg.jp/>)、海津市歴史民俗資料館 (<https://www.city.kaizu.lg.jp/kurashi/0000000791.html>)、岐阜県庁 (<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/288826.html>)、岐阜市リサイクルセンター (<https://www.city.gifu.lg.jp/kurashi/gomi/1002344/1015758.html>)、根尾谷断層観察館 (<https://www.city.motosu.lg.jp/0000001399.html>)、中山道鵜沼宿(<https://www.city.kakamigahara.lg.jp/kankobunka/1010039/unuma/index.html>)、中山道太田宿（例：中山道会館太田宿、<https://kaikan.ootajuku.net/>)。
- 17 日本語研修コース：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourses/>

参考文献

- 膽吹覚（2020）「報告：シンポジウム「地域文化を活用した留学生教育」」『福井大学国際教育交流研究』4、pp.31-38
- 内丸裕佳子（2013）「中級後半および上級前半の学習者を対象とした地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み」『岡山大学教師教育開発センター紀要』3 別冊、pp.117-124
- 正路真一（2021）「外国人留学生による三重地域文化発信 ―国際交流センター科目「日本事情Ⅰ」における Virtual Exchange の取組み―」『三重大学国際交流センター紀要』16、pp. 119-132
- 高橋千代枝（2022）「地域資源をリソースとして活用した留学生向け日本語教材の開発と実践についての一考察 ―2021年弘前大学サマープログラム日本語コースの事例―」『弘前大学国語国文学』43、1-28
- 平田未季（2016）「地域住民と留学生の協働による地域文化保存の試み」『秋田大学国際交流センター紀要』5、pp. 25-42

年 報（2023年 4 月～2024年 3 月）

1. 日本語研修コース	23
2. 日本語・日本文化研修コース	37
3. 日本社会文化プログラム	40
4. キャリア日本語	41
5. 全学共通教育	43
6. 年間行事	44
7. 交流ラウンジ	51

資 料

岐阜大学留学生数	55
----------	----

1. 日本語研修コース

日本語研修コースは、留学生の学習環境やレベルに合わせて選択できるよう、「集中コース」、「一般コース」の2つのコースが提供されている。集中コースは、1学期間、毎日の授業を必修とし、集中的に日本語を学ぶコースである。日本語を初めて勉強する学習者（未習者）、日本語を勉強したことがある学習者（既習者）それぞれのレベルに合わせたクラスが設定されている。未習者はしっかり日本語の基礎を学ぶことができ、既習者はさらなる日本語力の向上を目指して様々な技能を身につける。一般コースは、未習者、既習者共に、まとまった日本語学習の時間が取れない学生向けに、科目を選択して学ぶコースとなっている。

集中コースはゼロ初級・初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースはゼロ初級（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級（D）の4レベルに分けたクラスを提供している。

1.1 2023年度前期（2023年4月～9月）

前年度後期から、ガイダンス・プレイスメントテスト、そして授業も対面のみで実施していたが、今年度も同様に行うことができた。

学内公募による申請者は57名（教員研修生2名、研究生10名、大学院修士課程23名、大学院博士課程19名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生である特別聴講（研究）学生3名）で、コース別の申請者数は、集中コース8名、一般コース49名であった。うち、コース開始前に10名の辞退者があり、日本語・日本文化教育センター所属の交換留学生（日本社会文化プログラム学生）2名も含めた計49名が受講することとなった。

本学期のスケジュールは以下の通りである。

4月13日（木）ガイダンス・プレイスメントテスト

4月17日（月）授業開始

7月28日（金）授業終了

各クラスの時間割及び授業内容についてはコース別に報告する。なお、初中級（B）、中級（C）クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供しているため、3つに分けて報告する。

1.1.1 集中コース（第54期）

集中コースのみで提供されているのは、ゼロ初級・初級向けのAクラスである。

〔集中Aクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A 〔松尾〕	総合日本語A 〔中村〕	総合日本語A 〔廣瀬〕	総合日本語A 〔三輪〕	総合日本語A 〔秋山〕
2	総合日本語A 〔石井〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔小寺〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔河田〕
3				文字・語彙A 〔秋山〕	

授業報告（Aクラス担任：吉成）

Aクラスは集中コース希望者の未習者を対象としたクラスである。今学期の受講者は2名（研究生2名）で、国籍は東ティモール（1）、バングラデシュ（1）であった。2名という少人数であったが、1名はどの授業も欠席することなく参加し、1名は家庭の事情で休まなければならないこともあったが、まじめに授業に取り組んでいた。総合日本語Aでは『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』の37課まで（テストは35課まで）学習し、文字・語彙Aでは、文字や語彙を中心に復習する内容であった。両名とも初めて日本語を勉強する未習者であったこと、少人数だったこともあり、様子を見ながら授業進度を調整したり、活動内容を変更したり、二人に合った授業を行うことができた。2名だと学生同士の練習時間が単調になりがちだが、教師も含めた3名での会話を積極的に行い、少人数だからこそ目が届く指導ができたと思われる。

1.1.2 集中・一般コース

初中級（B）、中級（C）クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供している。集中コースとなる学生は10科目以上を必修とし、その他の学生は選択制として、履修届けを提出し受講する科目を決める。

[集中・一般Bクラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [小寺]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [松尾]	総合日本語B [河田]	総合日本語B [橋本]
2	語彙・読解B [野原]	口頭表現BC [橋本]	文章表現B [松尾]	口頭表現B [秋山]	聴解演習B [石井]

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルのクラスである。集中コースに3名（研究生2名（中国2）、博士課程1名（アフガニスタン））、一般コースに12名（教員研修生1名（メキシコ）、研究生1名（インドネシア）、修士課程7名（インドネシア2、ベトナム2、中国、東ティモール、ミャンマー）、博士課程2名（インドネシア、中国）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名（マレーシア1））が受講した。

本来であれば集中コース受講者は全10コマ必修、一般コース受講者は5コマから選択という受講の仕方であったが、昨年度集中コース受講者が少なく、またコロナ禍という状況を考慮し、一般コースの学生は10コマから選択で受講できることにしたところ、多くの授業を受講する受講者が多かったため、今期も引き続き10コマから選択で受講できることにした。通常であれば一般コース受講者は受講コマは5コマが上限であったが、今期はそれ以上の授業を受講することができ、実際全員5コマ以上を受講した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。今期の総合日本語Bは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。漢字語彙Bでは漢字学習を含めた語彙学習をベースにした読解練習を行った。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、コロナ禍の中、積極的に授業に参加していた。自発的に発言する学生が多く、積極的に日本語を使おうとする努力が見られた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

〔集中・一般Cクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	日本語演習C 〔吉成〕	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔小寺〕	文章表現C 〔吉成〕	総合日本語C 〔石井〕
2	漢字文法C 〔小寺〕	口頭表現BC 〔橋本〕		総合日本語C 〔野原〕	文章理解C 〔秋山〕
3	口頭表現C 〔石井〕				

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルであるCクラスを受講したのは、集中コース1名（日本社会文化プログラム学生（フランス1））、一般コース8名（修士課程2名（インドネシア1、ベトナム1）、博士課程1名（インドネシア1）、研究生2名（中国2）、教員研修生1名（カンボジア1）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）2名（フランス1、中国1））である。ただし、一般コース1名が事情により授業スタート前に受講辞退した。

集中コースは全科目の受講が必須、一般コースは全科目の中から選択できることとした。総合日本語C（週4コマ）は集中コースを含めた5名が受講し、『中級を学ぼう 中級前期第2版』を教科書として使用した。どの科目も少人数クラスとなり、全体としておとなしい印象ではあったが、皆まじめに授業に取り組んでいた。文章理解Cでは、学期末に日文センター和室で朗読会を開催し、他クラスの学生も聴衆として参加してくれた。民族衣装や浴衣などをまとい、堂々と発表する様子から成長がうかがえた。

1.1.3 一般コース

一般コースのみで提供されているのは、ゼロ初級（A1）、初級（A2）、中上級（D）のクラスである。

〔一般A1クラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	一般A1 〔石井〕	一般A1 〔松尾〕		一般A1 〔秋山〕	一般A1 〔田辺〕

授業報告（A 1 クラス担任：橋本）

A 1 クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は14名（修士課程4名、博士課程9名、研究生1名）である。国籍はインドネシア（5）、中国（3）、パキスタン（3）、フィリピン、ブータン、ペルーであった。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、A 1 クラスでは機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法積み上げではなく）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいる。

このクラスは口頭表現中心に授業を進めるので、文字学習は必ずしも必要ではなく、また文字学習を負担と感じる学生もいると考え、ローマ字を併記している『まるとA 1 りかい』を教科書として使用しているが、学習文法項目を増やすことで一般コース初級全体の到達レベルを上げることを考え、『A 1 りかい』の次に当たる『A 2 りかい』の前半を含めた内容にすることにした。しかし教科書を2冊使用することは受講学生の金銭的負担になると考え、今期は国際交流基金がオンラインで提供している『いんどり 生活の日本語 入門A 1』と『同 初級1 A 2』を使って授業を行うことにした。

受講生は熱心に授業に参加していたが、『いんどり』という教科書が音声インプットを重視した内容であり、また書籍形式ではないため既習文法項目や語彙を振り返ることが難しかったこと等があり、受講生にも教師にも扱いが難しかった。来期以降、教材を再考することにしたい。

〔一般A 2 クラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
2	一般A 2 〔松尾〕	一般A 2 〔中村〕		一般A 2 〔河田〕	一般A 2 〔田辺〕

授業報告（A 2 クラス担任：松尾）

一般A 2 クラスは、初級レベルのクラスである。受講者は6名（修士課程3名、博士課程3名）で、国籍はベトナム（3）、インドネシア（1）、ケニア（1）、台湾（1）であった。うち以前、A 2 クラスを受講した学生が2名、先学期に生活日本語クラスを受講した学生が3名受講した。また、開講後、A 1 クラスではレベルが合わないため、A 2 クラスに移った学生が1名いた。

一般クラスは、専門の授業などで多くの学習時間が取れない学生が多いため、一般クラ

スの教科書として活用形のルールが繰り返し何度も出てくる『まるごと初級1 A2りかい』（国際交流基金）を使用した。本学期は週4コマで開講した。

本学期は、以前A2クラスを受講した学生が受講することとなり、学期開始当初、生活日本語クラスから進んできた学生とのレベル差があった。生活日本語クラスから進んできた学生の中には、ひらがな・カタカナで書くことに慣れていない学生もいたため、書く練習を行う際、解答時間が大きく開いていた。また、『まるごと初級1 A2りかい』では、教科書の漢字にルビが振られていないが、クラス内では漢字学習にあまり時間を割いていなかったことに、困難を抱える学生も見られた。これらは受講学生の一部に見られた傾向であったため、授業計画を大きく見直すことはしなかったが、『まるごと』のWeb上の学習支援サイトを示して予習や復習を促したり、教師間で学生の状況に関する共有を丁寧に行なったりすることにより、徐々に改善が見られた。以前A2クラスを受講した学生は、以前学習した項目であっても真面目に学習に取り組み、着実に運用力を身につけていたものの、学期の後半、研究と関わる出張等で授業に参加できない日が続いたため、学期終了時には、クラス内でのレベル差は学期当初ほどには感じられなかった。実際、各課の終わりに実施したクイズの総計に大きな開きはなかった。

なお、A2クラスでは、例年Bクラスに進みたい学生が一定数見受けられるため、昨年度から、毎週、『日本語能力試験N5直前対策ドリル&模試 文字・語彙・文法』（森本智子・高橋尚子・松本知恵）の1回分の問題を渡すことにしている。任意の課題ではあったが、ほとんどの学生はきちんと提出をしていた。

【一般Dクラス】

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [野原]		総合日本語D [土谷]	総合日本語D [野原]	総合日本語D [田辺]
2			聴解演習D [廣瀬]	文章理解D [三輪]	口頭表現D [田辺]

授業報告（Dクラス担任：土谷）

Dクラスは、中上級レベルの日本語クラスである。本学期のDクラス受講者は5名（日本社会文化プログラム学生（以下社会文化）1名、学内公募の研究生2名、同修士課程1名、大学間協定校からの交換留学生1名）で、国籍は韓国（1）、中国（3）、ブラジル（1）であった。授業科目は、総合日本語D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D

(同)、文章理解D(同)が提供され、学生は最小1コマから最大7コマまで、専門科目の受講状況に合わせて受講科目を選択した。社会文化は上記全科目が必修で、さらに文章表現D(週1コマ)も課された。

春学期は総じて受講者が少ないが、週4コマある総合日本語Dに特に顕著な影響があり、2名のみの受講であった。話すことが大好きな学生2名で、学生同士の関係も良好であったが、地道な努力をしたとはいえず、予習復習もおざなりであり、この1学期での日本語力の伸びは実感できなかった。出席状況に問題のある学生はいなかったが、技能クラスにおいても目覚ましい向上が見られた学生はおらず、その点では残念であった。

春学期は受講生が少ないことを見越して、従来本研修コースを別建てしていた日本語・日本文化研修留学生用の口頭表現Dと文章理解Dを、研修コースと合併させた。開講授業数の合理化に益したと考えている。

1.2 2023年度後期(2023年10月～2024年3月)

後期の日本語研修コースも、すべて対面のみで、ガイダンス・プレイスメントテスト、開講式、そして授業を行うことができた。

学内公募による申請者は67名(教員研修生5名、研究生13名、大学院修士課程17名、大学院博士課程17名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生である特別聴講(研究)学生のうち、大学間の協定校から10名、部局間の協定校から5名)からの学部あるいは大学院所属の交換留学生)で、コース別の申請者数は、集中コース12名、一般コース55名であった。うち、コース開始前に5名の辞退者があり、日本語・日本文化教育センター所属の留学生(日本語・日本文化研修コース6名、センター所属の交換留学生(日本社会文化プログラム)8名)を含めた計76名が受講することとなった。

本学期のスケジュールは以下の通りである。

10月5日(木) ガイダンス・プレイスメントテスト

10月6日(金) 開講式

10月10日(火) 授業開始 12月27日(水)～1月9日(火) 冬季休暇

2月6日(火) 授業終了

各クラスの時間割及び授業内容についてはコース別に報告する。なお、初中級(B)、中級(C)クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供しているため、3つに分けて報告する。

1.2.1 集中コース（第55期）

集中コースのみで提供されているのは、ゼロ初級・初級向けのAクラスである。

〔集中Aクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A 〔石井〕	総合日本語A 〔中村〕	総合日本語A 〔廣瀬〕	総合日本語A 〔松尾〕	総合日本語A 〔秋山〕
2	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔小寺〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔三輪〕	総合日本語A 〔吉成〕
3				文字・語彙A 〔秋山〕	

授業報告（Aクラス担任：吉成）

今学期の受講者は7名（修士課程1名、教員研究生3名、研究生2名、日本社会文化プログラム学生1名）で、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ミャンマー、中国、バングラデシュ、アメリカ各1名ずつと、多国籍なクラスとなった。1名のみ日本語学習歴が長く、他は初めて日本語を学ぶ未習者であったため、クラス活動のスピードや課題量に気を配る必要があった。しかし、クラスの雰囲気はよく、助け合いながら、活発なクラス活動ができた。

総合日本語Aでは『みんなの日本語Ⅰ』と、『みんなの日本語Ⅱ』の37課まで（テストは35課まで）を学び、文字・語彙Aでは、文字や語彙を中心とした復習を行うという、週11コマでの授業スケジュールとなった。今学期は語彙の定着を図るため、各課の語彙の予習を課し、各課一回目の授業最初に語彙クイズを実施した。予習してこない学生もときどき見受けられたが、皆まじめに語彙を覚え、クイズに挑んでいた。点数も悪くなく、例年よりは語彙の定着が見られたように思う。語彙を覚えていると、授業内での口頭練習などもスムーズに行うことができ、また発展的な練習も行うことができた。教員研修生の多いクラスだったためか、受講者自身が予習の重要性を理解して、授業に対する準備ができていたと思う。

成績に関しては、授業内外で日本語学習に取り組んでいた受講者と、研究が忙しくてなかなか自学学習の時間がとれなかった受講者との間にはっきり差が見られた。文法テストだけでなく、学期最後の会話テストでも同様の結果であった。本来、集中Aクラスは、1学期間、日本語授業に集中できることが前提となっているが、現実には専門科目との両立が

必要な学生も多くなっている。すべての学生の学習状況に対応することは難しいが、クラス運営をどう行っていくのか、取り組むべき課題となっている。

1.2.2 集中・一般コース

初中級（B）、中級（C）クラスは、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供している。集中コースとなる学生は10科目以上を必修とし、その他の学生は選択制として、履修届けを提出し受講する科目を決める。

〔集中・一般Bクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B 〔小寺〕	総合日本語B 〔松尾〕	総合日本語B 〔橋本〕	総合日本語B 〔河田〕	総合日本語B 〔橋本〕
2	漢字・語彙B 〔野原〕	口頭表現BC 〔橋本〕	文章表現B 〔松尾〕	口頭表現B 〔秋山〕	聴解表現B 〔石井〕

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは集中コース6名（博士課程1名（インドネシア）、日本社会文化プログラム学生4名（フランス3、アメリカ1）、研究生1名（中国））、一般コース3名（博士課程1名（ベトナム）、研究生1名（中国）、教員研修生1名（メキシコ）、）が受講した。

本来であれば集中コース受講者は全10コマ必修、一般コース受講者は5コマから選択という受講の仕方であったが、今期は一般コース受講者が少なく、またコロナ禍という状況を考慮し、一般コースの学生は10コマから選択で受講できることにした。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。今期の総合日本語Bは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。漢字語彙Bでは漢字学習を含めた語彙学習をベースにした読解練習を行った。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、集中コースに国で初中級レベルを学習した学生がいた。通常こういっ

た学生でも十分な習得ができていないことがほとんどであるが（例えば国で日本語能力試験N2を取得した学生がBクラスになることがよくあるが、そのほとんどの学生が運用能力の面でBクラス初中級レベルが適当な日本語能力であった）、今期の学生は運用能力も高く、また個人的な興味からか漢字を相当数身に着けていて、他の学生とレベル差が生じたので、学生ごとに語彙や練習をコントロールしながら授業を進めた。

〔集中・一般Cクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	日本語演習CD 〔吉成〕	総合日本語C 〔小寺〕	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔野原〕	総合日本語C 〔河田〕
2	漢字・文法C 〔小寺〕	口頭表現BC 〔橋本〕		文章表現C 〔河田〕	文章理解C 〔秋山〕
3	口頭表現C 〔石井〕				

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルであるCクラスを受講したのは、集中コース3名（研究生2名（中国2）、日本社会文化プログラム学生1名（フランス1））、一般コース10名（修士課程2名（ベトナム1、中国1）、博士課程2名（中国1、アフガニスタン1）、研究生2名（中国2）、教員研修生1名（コートジボワール1）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）3名（エジプト2、マレーシア1））である。学期途中で、集中コースの1名が、専門科目が忙しくなり、2科目の受講を辞めたため、一般コースへと移ることになった。

すべての科目を一般コースにも開講し、4コマ出席必須の総合日本語Cには集中3名を含む9名が受講した。ただし、途中放棄するものが2名いた。技能科目でも数名の途中放棄者がおり、毎年の課題となっている。日本語演習CDは、例年Cクラス受講者のみであったが、今学期のみDクラス学生も希望があれば受講できることとした。授業内の態度や課題レポートなどでCクラスDクラスの差が見られたが、積極的に挑戦する姿勢がよかった。文章理解Cでは、日文センター内の和室にて、朗読会を実施した。今学期はいくつかの初級クラスも聴衆として参加し、よいお手本となったように思う。

1.2.3 一般コース

一般コースのみで提供されているのは、はゼロ初級（A1）、初級（A2）、中上級（D）のクラスである。

〔一般A1クラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	一般A1 〔松尾〕	一般A1 〔橋本〕		一般A1 〔秋山〕	一般A1 〔田辺〕

授業報告（A1クラス担任：橋本）

A1クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は24名（修士課程10名、博士課程9名（うち国費3）、協定校からの交換留学生（特別研究学生）5名）であった。国籍は、インドネシア（11）、インド（2）、中国（2）、東ティモール（2）、ガーナ、ケニア、ザンビア、台湾、チリ、パキスタン、マレーシアであった。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、A1クラスでは機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいる。

このクラスは口頭表現中心に授業を進めるので、文字学習は必ずしも必要ではなく、また文字学習を負担と感じる学生もいると考え、ローマ字を併記している教科書を使っているが、学習文法項目を増やすことで一般コース初級全体の到達レベルを上げることを考え、先学期は『いんどり 生活の日本語 入門A1』と『同 初級1 A2』を使用した。しかしこの教科書はオンラインで提供されているもので、扱いが難しかったため、今期は以前使用していた『まるごとA1りかい』（スリーエーネットワーク）に戻し、さらに『A1りかい』の次に当たる『A2りかい』の前半を含めた内容にすることにした。

受講生は熱心に授業に参加していたが、専門の研究のため授業を欠席したり、学期途中で専門の時間割が変更になったため授業に出席できなくなったりして、途中で受講をやめてしまう学生もいた。また、教科書が切り替わる時期がちょうど年をまたぐ時期に当たり、冬休みを挟んだことで教科書を購入できない学生がいて、授業進行が多少うまくいかなかった。来期以降考えたいところである。

〔一般A 2 クラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
2	一般A 2 〔松尾〕	一般A 2 〔中村〕	一般A 2 〔廣瀬〕	一般A 2 〔野原〕	一般A 2 〔河田〕

授業報告（A 2 クラス担任：松尾）

一般A 2 クラスは初級レベルのクラスで、受講者は8名（修士課程2名、博士課程4名、研究生2名）で、国籍はインドネシア（2）、中国（2）、バングラディシュ（1）、パキスタン（1）、東ティモール（1）、ペルー（1）であった。うち4名は前学期A 1 クラスを、1名は総合Aクラスを受講した学生であった。

一般クラスは、専門の授業などで多くの学習時間が取れない学生が多いため、一般クラスの教科書として活用形のルールが繰り返し何度も出てくる『まるごと初級1 A 2 りかい』（国際交流基金）を使用した。本学期も前学期同様に週4コマで実施した。

前学期、A 1 クラスでは『いろどり 生活の日本語』（国際交流基金）を使用し、動詞の活用の一部をすでに学習していたが、コンセプトが異なっていることもあり、本学期は『まるごと初級1 A 2 りかい』の最初から開始した。予想した通り、A 1 クラスを受講していた学生は、教科書のコンセプトの違いに最初は戸惑いを感じていたように思われる。聞いたり話したりすることには抵抗がなかったが、語彙や文型がなかなか定着せず、文作練習などの折には細かな誤りが散見された。このような状況を踏まえて学習支援を行うことで、徐々に正確性にも意識が向くようにはなっていたが、語彙や文型の定着状況は先学期に比べて芳しくなく、その結果は、各課のクイズの点数にも表れていた。課題（任意）も今学期は提出する学生が少なかった。

全体的に授業には熱心に取り組んでおり、学期の最後まで学習を継続した学生は多かった。しかし、8名のうち3名は8割の出席率を満たせず、それ以外の学生も出席状況は良いとは言えない状況であった。これには専門の授業や健康状態等も関わっており、学習意欲と直接関係するわけではないが、次学期以降、Bクラスの受講を希望する学生も少なくないため、出席の重要性については学期を通してしっかりと伝えていきたいと思う。

〔一般Dクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D 〔野原〕	総合日本語D 〔土谷〕		総合日本語D 〔三輪〕	総合日本語D 〔石井〕
2	文章理解D 〔石井〕		聴解演習D 〔廣瀬〕		口頭表現D 〔田辺〕
3	文章表現D 〔土谷〕				

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章（日本語・日本文化研修コース）を参照のこと。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

Dクラスは、中上級レベルの日本語クラスである。本学期のDクラス受講者は、17名（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）6名、日本社会文化プログラム学生（以下社会文化）3名、学内公募の研究生1名、同修士課程1名、大学間協定校からの交換留学生6名）で、国籍は韓国（2）、スペイン（1）、タイ（1）、中国（11）、ベトナム（1）、ポーランド（1）であった。授業科目は、総合日本語D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D（同）、文章理解D（同）、日研生と社会文化には加えて文章表現D（同）も提供する予定であったが、17名という過去最大人数に達したため、予定を変更せざるを得なくなった。

日研生と社会文化は上記全科目が必修である（上記以外に、必修日本文化科目もある）。授業運営上また教室のスペース上、各授業人数は10名強に抑える必要がある。毎学期希望者の多い口頭表現Dは、日研生・社会文化用、研修コース用を別建てにすることができるが、総合日本語Dと聴解演習Dと文章理解Dは最大17名全員が希望する可能性があり、対策が必要となった。その結果、①総合日本語Dは日研生・社会文化限定（受講者8名、社会文化1名は春学期に総合日本語D履修済）、②研修コース学生には別途Cクラス選択科目「日本語演習」を選択科目として提供、③希望者が多かった場合、聴解演習Dと文章理解Dは受講者抽選、以上の3方策を取ることにした。

幸い③の事態に陥ることはなく、各技能科目の履修者は、日研生・社会文化用口頭表現D（9名）、研修コース用口頭表現D（5名）、聴解演習D（11名）、文章理解D（11名）、日本語演習（4名）に落ち着いた。総合日本語Dが取れないことに不満を持つ学生もいたが、人数が膨張する秋学期については、総合日本語Dは日研生・社会文化限定とするのが今後も妥当かもしれない。秋学期に総合日本語Dが取れない学生については、春学期の履

修を推奨している。

本学期のDクラスは、おおむね高い水準で授業を行うことができた。その主な要因は、日文センター所属学生（日研生・社会文化）の積極的で真面目な学習態度である。日本語力に若干のばらつきはあるが、予復習、宿題の提出、授業内の発言等、努力が認められ、学期途中でやる気を失ったりメンタルが低下したりする学生は皆無であった。人数こそ多く、履修科目を制限せざるを得なかったが、Dクラスとしてほぼ理想的であったと言えよう。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第22期（2022年10月～2023年8月）概要

第22期生は、大学推薦の国費留学生3名（カセサート大学（タイ）、電子科技大学（中国）、フエ大学（ベトナム））、私費留学生2名（大学間学術交流協定による交換数の枠内での受入れ、華僑大学（中国）、広西大学（同））であった。

第22期 履修／修了生（姓アルファベット順）

ホー ティ ニュ ホアン（HO, THI NHU HOANG）	ベトナム フエ大学
チウサクル スパスタ（JIEWSAKUL, SUPASUTA）	タイ カセサート大学
李 巧珍（リ コウチン、LI, QIAOZHEN）	中国 華僑大学
劉 思然（リュウ シゼン、LIU, SIRAN）	中国 電子科技大学
王 雪桐（オー セットー、WANG, XUETONG）	中国 広西大学

第22期生は、2022年10月のコース開始時に1名の来日が約2週間遅れたこと、秋学期中に陽性者・濃厚接触者が発生し数日間授業をオンラインで受講しなければならなくなったことを除けば、新型コロナウイルスの影響を受けずに済んだ。ようやく通常のエデュケーション活動ができる安堵と喜びを、大いに感じた。コロナ禍で中断していた学内における日本文化ワークショップ（郡上踊り、能楽）や、学外見学も実施することができた。比較のおとなしい学生が多かったが、体験機会から楽しく多くを吸収していることは、明らかであった。通常授業の受講状況も申し分なく、教育する側にとっても教え甲斐のある学生たちであった。

2022年度をもって、長年にわたって本学の日研生コースを牽引してくださった森田晃一教授が定年退職された。第22期生は、同教授が最後に授業を担当した日研生である。それに相応しい学習意欲の高い学生たちであった。

本コースの詳細については、以下のサイトを参照願いたい。

<http://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourse/>

2.2 論文作成と発表会

本学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第22期生も、それぞれの興味関心に沿ったテーマで研究を行い、論文指導のゼミ教員や本学の日本人学生が務める論文チューターのサポートを得ながら論文を完成させ、堂々とした口頭発表を行った。

論文提出後に実施する口頭発表会は、ハイブリッド（対面＋オンライン）で実施し、日研生の在籍大学からの視聴や、日研生OBOGの参加を可能とした。会場には行けないが内容に興味があるという一般の参加者にとっても有効な手段で、今後もハイブリッド開催を続けていきたいと考えている。

本発表会については、本学公式サイトにも掲載されている。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2023/08/entry09-12606.html>

論文テーマと指導教員

ホー ティ ニュ ホアン

「日本の「おもてなし」 ―在日ベトナム人に対するアンケート調査から―

（指導教員：土谷桃子）

チウサクル スパスタ

「「推し活」に費やすお金と幸福度の関係 ―日本とタイの「推し活」の比較―

（指導教員：橋本慎吾）

李巧珍

「「方言コスプレ」についての考察 ―日中若年層の「方言コスプレ」実態調査に基づいて―

（指導教員：橋本慎吾）

劉思然

「日中両国の教育実習の比較研究 ―岐阜大学の教育実習を中心に―

（指導教員：土谷桃子）

王雪桐

「「忌み言葉」に対する若者意識の考察 ―日本と中国の比較を中心に―

（指導教員：土谷桃子）

2.3 履修科目

履修科目は以下の通りである（この他に選択科目もある）。

授業科目	秋期	春期	合計
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)
全学共通教育科目等	—	3 (6)	3 (6)
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語聴解演習	1 (2)	—	1 (2)
現代日本の社会	1 (2)	—	1 (2)
日本事情CⅡ	1 (2)	—	1 (2)
日本文学概論	1 (2)	—	1 (2)
地域実見	1 (2)	—	1 (2)
言語学入門	—	1 (2)	1 (2)
論文指導	—	1 (1)	1 (1)
修了論文	—	(4)	(4)
合計	13 (21)	8 (19)	21 (40)

表中の数値は、授業数（単位数）を表す（1授業は90分）。

3. 日本社会文化プログラム

3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を本センターで受入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行なうために開講したプログラムである。2007年度に開講し、2023年度は第29期となる。本プログラムは4つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

3.1.1 第28期（2022年度後期～2023年度前期）

2022年度後期に第28期の2名を迎えた。留学期間はうち1名は留学期間は半年間、1名は1年間である。

留学期間半年間の1名は日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得し、修了した。

留学期間1年間の1名は、異文化理解コース2、日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得し、修了した。

サンチェス サグラド ルーカス	スペイン	サマランカ大学	日本文化入門コース修了
ヴァズケズ ロマン	フランス	リール大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了

3.1.2 第29期（2023年度前期～2023年度後期）

2023年度前期に第29期の1名を迎えた。留学期間は1年間である。

日本社会文化コース1、日本社会文化コース2を受講したが、修了要件を満たさなかったため、修了できなかった。

チョン イェウン	韓国	木浦大学	日本社会文化コース1 修了
----------	----	------	---------------

4. キャリア日本語

4.1 受講概要

キャリア日本語は、中級レベル（日本語能力試験N3程度）以上で、日本での就職を希望する留学生を対象とした授業である。留学生に対する就職支援の一環として2020年度後期に開講し、以降、前期と後期に週1コマ（90分）11回の授業と2回の個別面談を実施している。本授業は日本語研修コース開始2週間後に、日本語研修コースの授業やFacebookページ、留学生向けのメーリングリスト、グローバル推進機構ホームページにて募集を行っている。

本授業は、内容言語統合型学習（CLIL）¹の考え方をベースとしており、自己分析、企業分析、エントリーシート・履歴書の作成、グループディスカッション、面接練習などの活動を通じて、日本の就職活動を理解しながら、そこで必要となる日本語を身につけていく。また、コース中には2回の個人面談を設けているが、それ以外の時間であっても、学生一人一人の状況に合わせて、相談ができる機会を提供している。

4.1.1 2023年度前期

今学期は2023年5月から2024年8月の期間に実施した。受講者は12名（学部3名、修士課程4名、博士課程2名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）3名）であった。専門別の内訳は、教育学部2名、工学部/研究科5名、自然科学技術研究科1名、地域科学研究科3名、日本語・日本文化教育センター1名であった。

学部学生の受講は今学期が初めてであったが、3名のうち2名は修士課程への進学を考えており、「大学院に入学してからは忙しいから、今のうちに受講した」というのが受講理由だった。博士課程の学生の多くはコース途中から欠席が続いた。博士課程の学生は、研究と就職活動、そして日本語学習を同時に進めることになるが、そのバランスをとるのが難しいものと考えられる。日本での就職を希望する学生には、早い段階から、就職活動までの計画を意識してもらうことが必要であり、そのことも踏まえ、今後の支援のあり方を検討していきたい。

4.1.2 2023年度後期

今学期は2023年11月から2024年2月の期間に実施した。受講者は18名（学部2名、修士3名、研究生7名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）5名、日本語・日本文化研修留学生1名）であった。専門別の内訳は、地域科学部/研究科10名、教育学部/研究科4名、自然科学技術研究科2名、日本語・日本文化教育センター

2名であった。

今学期は研究生の受講が多かったが、前期の学部生の受講理由と同様に、「大学院に入学してからは忙しいから」という理由が多かった。夏季インターンシップの募集が大学院入学直後に始まることを考えると、研究生として在籍している間に日本での就職活動について理解しておくことは結果的に日本での就職に繋がるものと考えられる。また、特別聴講学生や日本語・日本文化研修留学生については、将来的に日本での就職について考えたというニーズから参加していた。受講者が増えることで、一人一人に対する支援が十分に行き届かなくなる恐れがあるため、定員を超える場合は、就職活動を直近に控えている学生を優先する必要があるが、多様なニーズに応えられるよう、コースデザインを考えていきたい。

2023年度後期の授業スケジュール

回	月日	授業内容
1	2023/11/ 8	オリエンテーション／自己紹介
2	2023/11/15	自己分析①
3	2023/11/22	自己分析②
4	2023/11/29	業界・企業研究①
5	2023/12/ 6	業界・企業研究②
6	2023/12/11-15	個別面談①
7	2023/12/20	履歴書・エントリーシートの作成①
8	2024/ 1/10	履歴書・エントリーシートの作成②
9	2024/ 1/17	グループディスカッション①
10	2024/ 1/24	面接練習①
11	2024/ 1/31	グループディスカッション②
12	2024/ 2/ 7	面接練習②
13	2024/ 2/ 8-16	個別相談②

注

- 1 CLIL（クリル）は、Content and Language Integrated Learningの略称。特定の内容（教科科目やテーマ等）を、目標言語を通して学ぶことにより、内容と言語の両方を身につけていこうとする教育方法。

5. 全学共通教育

5.1 概要

日本語・日本文化教育センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

5.2 2023年度 前学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語 および 日本事情 科目	日本語DⅠ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情CⅠ	火2	橋本	
学人 文 科 目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月2	土谷	
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火2	橋本	日本語研修コース集中・一般B・Cクラスも受講

5.3 2023年度 後学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語 および 日本事情 科目	日本語DⅡ—文章表現—	月3	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情CⅠ	火2	橋本	日本語・日本文化研修生も受講
学人 文 科 目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラス、一般Dクラスも受講
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火2	橋本	日本語研修コース集中・一般B・Cクラスも受講

6. 年間行事

日本語・日本文化教育センターでは年間を通じ、様々な行事を行ってきた。2023年度（2023年4月～2024年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事（下線）内容について報告する。なお、ラウンジチューター企画のイベント（7月、1月）については、第7章「交流ラウンジ」の報告を参照されたい。

2023年

4月

日本語研修コース ガイダンス・プレイスメントテスト（4月13日）

日本社会文化プログラム 開始（4月13日）

日本語研修コース 授業開始（4月17日）

5月

キャリア日本語 授業開始（5月16日）

郡上踊りワークショップ（5月17日）

7月

ラウンジチューター企画「七夕まつり」（7月4日）

能楽（能・狂言）ワークショップ（7月5日）

日本語研修コース 授業終了（7月28日）

日本社会文化プログラム 終了（7月28日）

キャリア日本語 授業終了（7月31日）

8月

日本語・日本文化研修留学生 論文発表会（8月6日）

日本語・日本文化研修コース 修了式（8月24日）

10月

日本語研修コース ガイダンス・プレイスメントテスト（10月5日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース 開講式
(10月6日)

日本語研修コース 授業開始（10月10日）

11月

キャリア日本語 授業開始（11月8日）

十二単の着装と体験（日本文化ワークショップ）（11月15日）

12月

雅楽カルチャー体験コンサート（日本文化ワークショップ）（12月13日）

2023年

1月

ラウンジチューター企画「日本のお正月」（1月17日）

2月

日本語研修コース 授業終了（2月6日）

日本社会文化プログラム 終了（2月6日）

キャリア日本語 授業終了（2月7日）

6.1 郡上踊りワークショップ

新型コロナウイルスの影響により、2020年度以降中断していた郡上踊りワークショップを、5月17日（水）、4年ぶりに開催した。郡上市や郡上踊りに関する事前講義を行う、人数把握のために事前に着付け人数を制限するチケット制を導入するといった新たな工夫を加え、改善に努めた。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2023/05/entry23-12409.html>

日本語・日本文化教育センター 郡上踊りワークショップを開催しました

本学日本語・日本文化教育センター（日文センター）は、2023年5月17日（水）、日文センター和室において、昨年11月にユネスコ無形文化遺産に認定された、国重要無形民俗文化財の「郡上踊り」を学ぶワークショップを開催しました。当日は約20人の留学生が参加しました。このワークショップは、2012年から2019年まで毎年開催し、コロナ禍では中断を余儀なくされていましたが、4年ぶりに開催することができました。

ワークショップが始まる前に、美濃市の国際交流支援グループ「せびあ会」の方々に浴衣を着付けしてもらいました。インドネシア、ガーナ、韓国、タイ、中国、





フランス、ベトナム、ベルギーの留学生たちは、色とりどりの浴衣を前に、どれを着ようか嬉しそうに迷っていました。

ワークショップには、郡上踊り保存会囃子部・口明方囃子部の遠藤光生氏、熊澤里重氏を講師としてお招きしました。最初に郡上市や郡上踊りの概要についての説明があり、その後、郡上踊りの中

で代表的な曲「かわさき」と「春駒」の2曲の踊りを習いました。

ほとんどの留学生は初めて郡上踊りを体験しましたが、1時間半のワークショップを通して講師も感心するほど上達しました。同じ側の手足を動かす独特の動作に苦戦する留学生もいましたが、「上手下手ではない、笑顔で楽しく踊ることが一番大切」という講師の言葉に励まされて、それぞれがのびのび踊ることができました。最後には、楽しくそして真剣に踊った留学生10名が講師によって選ばれ、岐阜ゆかりの賞品が手渡されました。留学生にとって、日本や岐阜の文化を感じる貴重な機会となりました。

6.2 能楽（能・狂言）ワークショップ

2023年度の本ワークショップは、7月5日（水）対面のみ形式で開催した。対面実施が再開されたサマースクール参加学生も出席した。前日に事前講義も提供した。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2023/07/entry13-12531.html>

「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました

本学グローバル推進機構 日本語・日本文化教育センター（以下、「日文センター」という）は、令和5年7月5日（水）に「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました。日文センターでは、2005年度からプロの能楽師をお迎えして能楽（能・狂言）ワークショップを行っています。今年度は4年ぶりに完全対面方式で実施し、約50名の参加がありました。6月末から本学に留学しているサマースクール参加学生も加わり、さまざまな国籍の学生が集い、日本の伝統文化を堪能する機会となりました。

講師として観世流シテ方の味方團先生および田茂井廣道先生（以上能の講師）、大蔵流

狂言方の茂山忠三郎先生および山口耕道先生（以上狂言の講師）の計4名を、日文センター和室にお迎えしました。

仕舞「岩船」の実演を皮切りに、能楽の歴史及び能と狂言の面や所作の違いについての講義、能楽の音楽（楽器と謡）、狂言の「笑い」の表現、狂言「寝音楽」の鑑賞、能装束の着付けといった盛りだくさんの内容が、テンポよく次々と展開されました。同じ若い女性を表す面でも、能と狂言とは全く趣が違ふことや、能の蔓が馬のたてがみや尻尾の毛でできていて硬いことなど、間近で本物を見なければ分からない多くのことを学びました。参加者からは「先生たちは本当に優しくて、内容が面白くて、とても楽しかったです」「興味があること、質問したいことがたくさんあったので、それを聞ける質問の時間があると嬉しいです」といった感想が寄せられました。

今後、グローバル推進機構は、多文化交流の機会を提供していくなど、本学のグローバル化に向けた活動を展開していきます。



6.3 十二単の着装と体験 ―日本の民族衣装―

既述の郡上踊りワークショップと同様、新型コロナウイルスの影響により、2020年度より中断していたが、2023年度は再開に漕ぎつけた。事前講義も実施した。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2023/11/entry27-12838.html>

「十二単の着装と体験 ―日本の民族衣装―」を開催しました

本学日本語・日本文化教育センター（以下、「日文センター」という。）は、11月15日（水）、日文センター和室において、日本文化ワークショップ「十二単の着装と体験 ―日本の民



族衣装一」を開催しました。当日は、日文センター所属の日本語・日本文化研修コースの留学生（以下、「日研生」という。）や社会文化プログラムの留学生をはじめ、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員など、総勢36人が参加しました。

本ワークショップでは、和服の着付けを専門に指導されている伊藤慶子（豊装慶）氏をはじめとした5名の講師陣によって指導が行われました。講師の方々は紋付・袴の正装で立ち合わせ、会場に雅楽のBGMが流れる荘厳な雰囲気の中、参加者たちに十二単の魅力が伝えられました。

日文センターの土谷教授からは、日本語・英語両言語で十二単の歴史や基礎知識について説明があり、その後、モデル希望者の中から選抜されたタイ出身の日研生、スアンボーレ・タンチャノクさんが、小袖と長袴を身にまとい、化粧の下準備をし、髪を釵子で飾りながら会場に入室しました。

十二単の着付けでは、講師は作法に従い「御方様」であるスアンボーレさんに敬意を表しながら、単、五衣、表着、唐衣、裳の順に着付けが行われました。留学生たちは、緑やピンクの鮮やかな衣をまとっていく様子に興味深く見入っていました。すべての着付けが終了すると、十二単に檜扇を持ったスアンボーレさんを囲む記念撮影の輪ができました。十二単は重ねたままスルッと簡単に脱げ、脱いだ後もそのまま人が座っているような印象を与えます。これを「空蟬」といいます。この空蟬の中に男女を問わず学生たちが次々と入り、重さを実感し、しきりと友だち同士で写真を撮り合っていて楽しんでいた。

参加者からは、日本の伝統文化の奥深さや美しさを堪能することができたとの感想が寄せられるなど、日本文化教育の充実につながる有意義な機会となりました。今後も、参加者が楽しみながら日本文化を理解することができるよう、よりよい体験の場を提供していきます。

6.4 雅楽カルチャー体験コンサート

従来秋学期の日本文化ワークショップは1回のみであったが、前年度好評だった「雅楽カルチャーコンサート」を、既述「十二単の着装と体験」とともに開催することとなった。日本語が理解できない参加者のための英訳資料が準備されるなど、前年度より充実した内容となり、12月実施のウィンタースクールの参加学生たちも出席し盛会となった。ワークショップ自体の内容は素晴らしかったが、短期間で2回のワークショップを運営する負担や、予算枠が縮小する中での謝金の確保などの問題があり、次年度も開催できるかは不透明である。

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2023/12/entry21-12896.html>

「雅楽カルチャー体験コンサート（日本文化ワークショップ）」を開催

本学グローバル推進機構 日本語・日本文化教育センター（以下「日文センター」という）は、12月13日（水）に、「雅楽カルチャー体験コンサート（日本文化ワークショップ）」を開催しました。

当日は、インド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学から受け入れているウィンタースクール参加学生や日文センターの日本語・日本文化研修留学生等、約40名の参加者が日本の美しい伝統文化を楽しみました。講師には、雅楽の普及活動をしている近藤泰史先生、同智佳子先生をお迎えしました。

ワークショップ前半は、雅楽コンサートとその歴史を学ぶ講義が行われました。参加者は「越天楽」を聴いた後、雅楽は日本に流入したさまざまな文化の融合の結果生まれたものであることや、雅楽楽器が姿を変えて現代の楽器になっていることをクイズ形式で学びま



した。日本語が堪能ではない留学生のための英訳資料も準備され、質問タイムでは次々と活発に質問が飛び出しました。

後半は体験パートで、参加者は雅楽楽器の箏、龍笛、法螺貝などを演奏体験したり、狩衣や袷といった平安時代の衣装を実際に身にまったりしました。楽器の音を何とか出そうと奮闘したり、美しい衣装に身を包み友達同士で写真を撮り合ったりと、楽しく賑やかな時間を過ごしました。参加者からは、「日本の伝統的な音楽や衣装について知るとてもいい機会になりました」「楽しかったです。楽器の音が本当にきれいでした」といった声が寄せられました。

今後も、グローバル推進機構では、本物の日本文化に触れる機会を提供するための活動を展開していきます。

7. 交流ラウンジ

2012年4月、旧留学生センターに「交流ラウンジ」が設置され、2017年4月のセンター移転（共通教育棟4階）に伴い、交流ラウンジの場所も変更となった。そして2018年4月に「日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）」とセンターの名称変更があったが、交流ラウンジの場所やここでの活動内容は変更なく続けている。しかし、2020, 2021年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、ラウンジの使用を制限し、チューター活動やイベントも行わなかった。2022年度後期（10月）から、ラウンジ活動を再開することができ、2023年度は前期から、コロナ禍前と同様の活動を行うことができた。その活動や利用状況などを報告する。

7.1 ラウンジチューター活動

交流ラウンジは多目的に活用されているが、中心となるのはラウンジチューター活動である。学期中の平日（金曜日を除く）午後2時45分から4時45分の2時間、1～2名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流する場を提供している。今年度は、前期は火曜日～木曜日の週3日、後期は月曜日～木曜日の週4日、チューターを配置した。宿題やレポート提出が週の始めに多く、利用者が増えたこともあり、後期途中から月曜日に1時間だけ2人体制とした。

活動時間内にやってくる留学生の目的は様々だが、日本語クラスの宿題チェックやレポートの添削など、日本語学習に関わる活動を目的とする学生が多い。日本人学生と話したい、日本語で会話したいという目的で訪れる学生もいる。今年度の傾向として、ラウンジの居心地がよく、ラウンジで自習するために来る学生や、チューターを囲んで数人のグループで楽しくおしゃべりする姿などが見られた。日本語があまり話せない留学生も、中上級レベルの留学生の助けを借りつつコミュニケーションをとっている様子もあり、ラウンジが留学生同士の交流の場にもなっていることをうれしく感じた。

ラウンジチューター活動は曜日によって来訪者数が異なることが課題となっている。順番を待ってもらう日もあれば、一人も来訪がない日もあり、来訪者の人数が読めない難しさが毎回ある。利用者を増やすために、日本語授業や社会文化プログラムの授業の課題として、レポートは必ずラウンジチューターチェックを受けてサインをもらうことを課すなど、利用を促す試みを行った。功を奏し、特に後期は来訪者数が増えた。利用者が多すぎる時もあり、今後はその対応について考えていきたい。

チューターには毎回、日誌としてラウンジ利用状況を報告してもらい、学期末にはアンケートを実施し、感想だけでなく、よりよいチューター活動にするための提案などを報告

してもらっている。実践的なアイデアもあり、毎回よい参考となっている。そして今年度は新たな試みとして、ラウンジ利用者である留学生にもアンケートを行った。日本語研修コースの受講者を中心に実施し、利用者は活動に満足しており、さらなる希望・要望も知ることができた。利用していない人にも、その理由を尋ね、今後の利用促進につながるヒントが得られた。チューターにもアンケート結果を報告した。今後のよりよいチューター活動の一助にしたいと思う。

7.2 ラウンジチューター企画イベント

例年、年に2回、ラウンジチューター主催による留学生向けのイベントを開催してきた。今年度は無事に、夏は「七夕まつり」、冬は「日本のお正月」を実施することができた。

7.2.1 「七夕まつり」

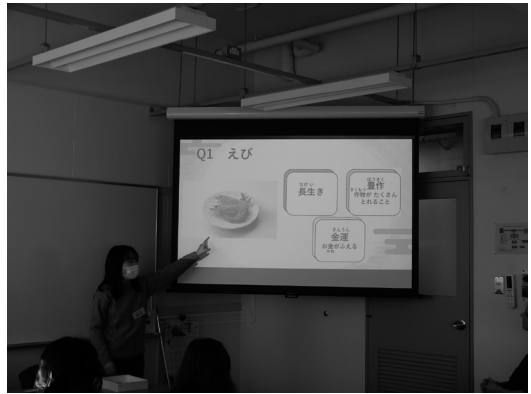
2023年7月4日（火）14:30～16:30、404セミナー室においてラウンジチューター企画による「七夕まつり」が開催された。当日は留学生、日本人学生、サマースクールの留学生等22名の参加があった。パワーポイントを使って七夕について学び、皆で短冊に日本語や母国語などで願い事を書き笹に吊るした。グループに分かれてそれぞれ母国での七夕や文化についての発表もあった。他に、カルタ大会で盛り上がり、けん玉やコマ回しも大人気で終始賑わった。最後に記念写真を撮りイベントを終えた。留学生と日本人学生との



交流ができ、とても有意義な時間だった。

7.2.2 「日本のお正月」

2024年1月17日（水）14:30～16:30、404セミナー室においてラウンジチューター企画による「日本のお正月」が開催された。当日は留学生、日本人学生等32名の参加があった。今回は二部制で、第一部はパワーポイントを使ってお正月の風習や食べ物の説明の後○×クイズをし、お正月について楽しく詳しく学んだ。グループに分かれてそれぞれのお正月文化についての発表もあった。第二部は、カルタや書初めや福笑い、けん玉にコマなど、お正月遊びを楽しんだ。初めて体験する留学生も多かったようで、とても盛り上がっていた。留学生と日本人学生との交流だけでなく、留学生はお正月について、楽しく詳しく学べた機会となったであろう。



7.3 ラウンジの利用者数

ラウンジがどのくらい利用されているのかを把握するため、開設当初からのべ利用者数をまとめている(表1)。2016年度から、ラウンジチューターイベント（七夕まつり、お正月イベント）の参加者を除いた数を利用者数としているため、この年度の数が少なくなっている。しかし、その後2019年度まで徐々に利用者数が増えてきていたことがわかる。2020,2021年度はコロナ禍により、ラウンジ利用を取りやめ、2022年度前期はラウンジを開放したものの、チューター活動は行わなかった。そのため、データを収集していない。2022年度後期は、そもそも留学生数が少なかったことや、距離を開けての利用促進などもあり、極端に利用者数が少なかった。今年度は少しずつ利用者が増えてきた結果が見てとれる。来年度はさらにラウンジに活気が戻ればと思う。

表 1. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

年度	前期配置期間と利用者数	後期配置期間と利用者数	合計
2023	4月25日～7月27日 133人	10月10日～2月1日 307人	440人
2022		11月7日～2月9日 80人	80人
2021			
2020			
2019	4月11日～7月31日 376人	10月10日～2月7日 324人	700人
2018	4月13日～7月30日 405人	10月9日～2月8日 320人	725人
2017	4月17日～7月26日 330人 (金曜日は閉室)	10月10日～2月7日 296人	626人
2016	4月18日～7月28日 209人 (金曜日は閉室)	10月11日～2月10日 348人	557人
2015	4月13日～7月31日 354人 (金曜日は閉室)	10月12日～2月4日 301人	655人
2014	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
2013	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
2012	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

ラウンジは、ラウンジチューター活動以外にも、日本語研修コースのクラス発表、社会文化プログラムのオリエンテーション、学生との面談等、様々な用途で使用されている。また、日本人学生向けの海外留学や学術交流協定校に関する資料、留学経験者の報告書もあり、留学に関する情報収集をすることもできる。ラウンジの壁面には日本語・日本文化教育センターで行われた様々なイベントの写真や、日本語授業で行われた発表ポスターなども掲示している。

これからも、留学生そして日本人学生共に、誰もが気軽に利用できる場となるよう、環境づくりや広報活動に力をいれていきたい。

岐阜大学外国人留学生数（在籍別）

令和6年3月4日 現在

研究科・学部等 在籍身分	区分	教育研究科		地域科学	医学研究科	工学研究科	応用生物科学部	社会システム	自然科学技術	共同獣医学	連合農学	連合創薬医療	流域圏科学	日本語・	計			男女別合計		合計
		教育学部	地域科学研究科	医学部	工学部	学部	経営学部	研究科	研究科	研究科	研究科	研究科	研究科	国	私	国	私	国	私	
		国	府	私	国	府	私	国	府	私	国	府	私	国	府	私	国	府	私	
学部				9	1	2										1	6	20	27	42
			1		3												0	5	10	15
大学院(修士課程)			7													3	0	41	44	78
			13						3	34							4	0	30	34
大学院(博士課程)						3	8	31		3	10					21	0	52	73	123
				3	5	11					10	17	2			17	0	33	50	
研究生		4		3		1	5	1								6	0	15	21	37
		3	2	7	1		1		1					4	1	3	0	13	16	
特別研究生				1			2									0	0	5	5	8
				1			1									0	0	3	3	
特別聴講学生				2			2		2							4	0	0	10	23
		6						1	1							5	0	0	13	
日本語・日本文化研 修生																2	0	0	2	6
															4	4	0	0	4	
短期特定課題受託 研修生																0	0	0	0	1
										1						0	0	1	1	
小計		4		22	1	5	9	6	47	1	3					6	31	6	145	318
		3	8	22		7	5	5	13		6					5	28	5	103	136
合計		4	22		6			2	39	3	30	0	4		6	0	182	0		
		11	22		7			1	24	0	28	4	1		9	0	136	0		

上段は男性、下段（網掛）は、女性を示す

令和6年3月4日 現在

左は男性、右(網掛け)は女性

国名順は、外務省外務報道官編集「世界の国一覽表」による

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2023

執 筆 者

吉 成 祐 子	岐阜大学 日本語・日本文化教育センター教授
土 谷 桃 子	岐阜大学 日本語・日本文化教育センター教授

編 集 委 員

橋 本 慎 吾	日本語・日本文化教育センター長（編集委員長）
土 谷 桃 子	日本語・日本文化教育センター教授
吉 成 祐 子	日本語・日本文化教育センター教授
松 尾 憲 暁	日本語・日本文化教育センター助教

●編集後記

紀要の編集作業時期は、新しい年度・学期が始まっており、慌ただしい毎日の中、2023年度がずいぶん前のことのように感じられます。改めて年度を振り返ると、授業やイベントもかつてのように行えるようになったなあと感慨深く、また、現在進行中の授業もがんばらなければと奮起するいい機会となっています。そして来年度は…と先のことを考えることにもなり、発行することの意義を感じます。

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2023

2024年 7 月発行

岐阜市柳戸 1 番 1

編集兼
発行者 岐阜大学 日本語・日本文化教育センター
責任者 橋 本 慎 吾

印刷所 西 濃 印 刷 株 式 会 社
岐阜市七軒町15番地

Bulletin of the Center for Japanese Language and Culture
Gifu University
2023

Preface : HASHIMOTO Shingo..... 1

1 . Article

YOSHINARI Yuko

Japanese Language Learners' Awareness of Misuse
: Insights from Eye-Tracking Analysis Using Error Detection Quizzes..... 3

2 . Class Report

TSUCHIYA Momoko

Ingenuity and issues of Japanese Culture Classes
: “Easy Steps to Japanese Culture”, “Local Field Study—Discover Gifu”.....13

3 . Annual Report (2023.4-2024.3)

Published by
Center for Japanese Language and Culture
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan